

ご協力いただきありがとうございました

大会のあり方についての調査 (期間:2014/12/6-2014/12/22)

回答者数 1007

問1: 大会のあり方		
分野を限定した集会を年に複数回開催	77	8%
分野を限定した集会を年に複数回開催、年に一度の大会を開催	30	3%
年に一度の大会を開催	875	87%
その他	25	2%
	1007	100%
問2: 大会期間について妥当だと思う日数		
2日間	61	6%
2日間、3日間	10	1%
3日間	738	73%
3日間、4日間	30	3%
4日間	168	17%
	1007	100%
問3: 特別講演 (Plenary Lecture)		
必要	554	55%
必要ない	116	12%
どちらでもよい	337	33%
	1007	100%
問4: 一般講演とシンポジウムの比率		
一般講演を減らす	114	11%
シンポジウムを減らす	253	25%
現状でよい	622	62%
その他	18	2%
	1007	100%
問5: 一般演題の発表形式		
ポスター発表か口頭発表かのいずれかを発表者が選択	339	34%
ポスター発表のみ	78	8%
ポスター発表は全員行い、口頭発表は希望者から選別する	529	53%
口頭発表のみ	48	5%
その他	13	1%
	1007	100%
問6: プログラム・要旨集・発表図表の言語		
すべて英文	169	17%
プログラムと要旨は英文、発表図表は自由	206	20%
プログラムは英文、要旨と発表図表は自由	460	46%
その他	172	17%
	1007	100%
問7: 発表時の言語		
発表・討論ともに英語	49	5%
発表・討論ともに自由	808	80%
発表は英語、討論は自由	81	8%
その他	69	7%
	1007	100%
問8: 懇親会		
これまでとは違う形式 (若手による企画など) にする	131	13%
会費を低額にする	181	18%
会費を低額にする、これまでとは違う形式 (若手による企画など) にする	28	3%
必要ない	247	25%
現状でよい	150	15%
どちらでもよい	259	26%
その他	11	1%
	1007	100%
問9: 他学会との合同開催 (複数回答可)		
2~3回に一度合同開催する	145	
2~3回に一度合同開催する、分子生物学会とだけ合同で開催する	27	
2~3回に一度合同開催する、分子生物学会以外の学会とも合同開催する	86	
2~3回に一度合同開催する、分子生物学会以外の学会とも合同開催する、分子生物学会とだけ合同で開催する	1	
分子生物学会とだけ合同で開催する	120	
分子生物学会とだけ合同で開催する、毎回単独開催とする	2	
分子生物学会以外の学会とも合同開催する	91	
分子生物学会以外の学会とも合同開催する、分子生物学会とだけ合同で開催する	3	
分子生物学会以外の学会とも合同開催する、毎回単独開催とする	2	
毎回合同開催とする	113	
毎回合同開催とする、2~3回に一度合同開催する	1	
毎回合同開催とする、2~3回に一度合同開催する、分子生物学会とだけ合同で開催する	2	
毎回合同開催とする、2~3回に一度合同開催する、分子生物学会以外の学会とも合同開催する	1	
毎回合同開催とする、分子生物学会とだけ合同で開催する	94	
毎回合同開催とする、分子生物学会以外の学会とも合同開催する	61	
毎回合同開催とする、分子生物学会以外の学会とも合同開催する、分子生物学会とだけ合同で開催する	4	
毎回単独開催とする	99	
どちらでもよい	138	
その他	17	
	1007	
毎回合同開催とする	276	21%
2~3回に一度合同開催する	263	20%
分子生物学会以外の学会とも合同開催する	249	19%
分子生物学会とだけ合同で開催する	253	19%
毎回単独開催とする	103	8%
どちらでもよい、その他	155	12%
	1299	100%

<p>多少発表方法やシンポジウムの比率を変えたりして、春季、秋季の二回開催したらどうでしょうか？</p> <p>問1の「分野を限定した集会を年に複数回開催」につきましては、賛成しかねます。学会は、異分野の研究に触れる(あるいはその研究者を知る)貴重な機会だと思います。分野を限定してしまうと、そのような機会を失ってしまうことになると思います。また、「生化学会」である意味も低下してしまうと思います。</p> <p>【問1:大会のあり方】何もかもを生化学会だけで実施する必要はないと思います。大会は年1回、合同で開催し、テーマをしばった会については、既存のものについては学会員が参加している他の研究会や学会の集会を「生化学」で積極的に紹介すること(参加した人に1~2ページの紹介記事を書いてもらって掲載する、など)で対応できると思います。むしろ、「すごく新しい」とか「内容的に研究会として成立させにくい」などの理由で、まだ学会や研究会が立ち上がってないようなことについて、生化学会として(参加者を学会員に限定しないような)「勉強会」みたいなものを開催すれば、面白いことができると思います。</p> <p>開催時期を科研費申請のある10月以外にしてほしい。出来れば11月が12月。</p> <p>問1:分野を限定すると複合領域の人が参加しにくい</p> <p>分野限定の集会を複数回とするなら、大会は2-3年に一度くらいかでもよいかもしい。</p> <p>問2の大会期間は、単独開催の場合です。□</p> <p>ライフサイエンス分野に関連する複数の他学会と合同で、1週間~10日程度の長期間の国内大会を希望します。□</p> <p>普段は足を運ばない学会にも参加できるため、得られる情報・人間関係の幅が広がると思います。□</p> <p>年に複数回出張しなくてよくなるので、時間的・金銭的負担も軽減される方が多くなると思います。</p> <p>規模が大きくなりすぎた感はありません。スリム化が必要と感じています。ただ、分野を限定して年複数回行くと、複数回参加する場合に出張経費が嵩むことも確かです。また、分生とは毎年合同開催にすべきでしょう。同じ様な演題で別々の学会に発表する意味はないと思います。</p> <p>分子生物学会と合同で2年に1回、4日間。□</p> <p>単独で2年に1回、3日間が妥当だと考えます。</p> <p>問1. 分野を限定した集会はたくさんあるので、生化学会のような大きな学会でこそ分野に限らないことをやるべき。</p> <p>問1、問5: 単独開催する年には、年に1回、「査読あり」の口頭発表中心の大会を開催し、各年に1~2回、分野をある程度限定した査読無し(他学会との合同開催など)も行なうのが良い。(1番と2番の折衷案。)分子生物学会との合同開催の年は、年1回のみ規模の大きな学会し、ポスター発表中心で、口頭発表は希望者から選抜。</p>
<p>今回の4日間は、必要以上に長く感じました。</p> <p>開催期間は、単独開催なら3日間、合同開催なら4日間が妥当だと思う。</p> <p>問2について:3日間の全日程が妥当であるが、金曜日の午後から始まって日曜日の14時頃に終了するのが参加者にとっては理想的な日程と思われる。</p> <p>日数に関しては、無理に2,3日に詰め込むより、適度に1日あたりの会場、ポスター数を減らしても、参加者が聞きたい講演等が重なることを減らす方が効果的と考えている。</p> <p>分子生物学会と合同開催で3-4日間。□</p> <p>公募演題を増やしたワークショップを基盤として、シンポジウムもシートトークを公募する。</p>
<p>【問3:特別講演(Plenary Lecture)】特別講演とほかの口頭発表などが時間的にぶつかっているために聞けない場合があります。一定期間だけ、とか、大会の参加者以外は有料、という制限があってもよいので、特別講演の録画をネットで見られると便利ですが、難しいでしょうか。</p> <p>シンポジウムを極力減らし、ミニ・シンポジウムのもの(1から1.5時間)を増やすべき。</p> <p>ポスター発表は必要であるが、時間や混雑などのため全部をみるのは大変むづかしい。関連ポスターについてポスター会場の中にスペースを設け、発表者がスライドを使用して5分presentationをするような設定をしたらどうかとおもう。液晶プロジェクター、スクリーン、ある程度の簡易椅子などをセットする必要がありセッティングは大変であるとおもわれるが、他のことにお金を使用するよりこちらの方が価値があると思う。言語はそろそろ、生化学会も分子生物学会も発表についてはすべて英語に切り換える事を考える時期であるとおもう。</p> <p>プログラムに日本語のタイトル、名前、所属も加える。□</p> <p>シンポジウムの数が多すぎる。流行にそつたありきたりなものが多い。講演者が企画者の意向にかたよっている。□</p> <p>もつとその年の年会長の独自の考えを加えて、決めたほうが良いのではないかと。会員から申請されたシンポジウム□</p> <p>をただ採択すると、テーマがかたよりがちになる。□</p> <p>もつと数を減らしたほうが良い。</p> <p>もう二十年ほど前になりますが、「ポスターか口頭か」で議論になりました。その際「あくまで一般公演が学会大会の中心であり、ポスターになったからと言って□</p> <p>粗末に扱うわけではない」との説明がたびたびなされました。しかしながら、一般公演軽視の傾向はその後どんどん加速されています。ポスター討論の時間が特別講演やシンポを「邪魔しないように」配置され、ポスター会場もシンポなどのメイン会場の「邪魔にならないよう」選ばれています。ポスターの方は相当の早足で歩かないと全部見きれないほどに展示され、英語のポスターをじっくり読む時間などありません。いかに語学の達人でも、母語ほどの速度で外国語を読めないのは当然です。現形式を維持しての英語公用語化は、もう単なる業績づくりとしか言えません。加えて莫大な量の、しかも毎年代わり映えせず他の学会との差別化もないシンポがポスターを見る時間をさらに圧迫します。これを逆手に取ったのか、およそ議論能力のない学生をポスター前に立たせた、いわゆる「貼り逃げ」が増えています。執行部の方々は一度実際にポスター会場で討論して回ったら如何でしょうか。ポスター導入時に利点として挙げられた「濃密な議論」はそこに存在しないことが分かるはずで、学会大会を有益な研究情報交換の場にするためには、相当抜本的な改革が必要です。</p> <p>生化学会は、一般発表だと基本的にポスター発表になってしまうので、最近足が遠のいています。ポスターだと数が多いので、ざっと見るだけでも疲れてしまいます。もう少し口頭の比率が多くなると、又発表する気になるかもしれません。□</p> <p>言語は、日本の学会なので、基本的に自由(日本語)が良いと思います。シンポジウムやワークショップの方針として英語を公用語にするのはありと思いますが、全体としては自由のほうが、国内の研究者の活発な議論が望めると思います。</p> <p>生のデータをもとに議論する一般講演を中心においた会にすべきと言うのが私の持論です。</p> <p>【問4:一般講演とシンポジウムの比率】この2種類、1演題あたりの持ち時間以外にどう違うのか、実際に参加して発表を聞いてみてもよくわからないので、比率うんぬんについては言えません。□</p> <p>シンポジウムについて:昨年も感じましたが、聴講者がどの会場もとても少ないです。素晴らしい演者を招聘しているのに実にもったいないことです。一般演題口頭発表との同時進行方式をやめて、シンポジウムに集中できるようにした方がいいのではないのでしょうか。</p> <p>プログラム構成をもう少し考慮してほしい。同分野別のシンポジウムが同時時間帯に開催されている今のプログラム構成では、非常に会場が選り難いし、とても損をした気分になる。</p> <p>まずシンポジウムですが、学会執行部の企画が多く、自由度が無いという印象を持っています。</p> <p>問4:一般演題とシンポジウムが重ならないようにしてほしい</p> <p>問4について:公募シンポジウムに関連するが、外国語圏の研究者を招く国際シンポジウム企画と講演者への援助は生化学会独自のものであり、私どもの企画も採用されて国際交流と意見交換に役立っている。大変素晴らしい企画であり、是非今後も続けて欲しい。</p>

<p>問4:一般講演とシンポジウムの比率          学会大会の本来の姿を考えると、会員による研究発表と会員の前の討論の場であり、その充実が基本と思います。シンポジウムの比率が一般講演よりも大きくなると、学会大会の本来の姿から離れ会員の減少にもつながるように危惧されます。</p>
<p>生化学会大会では口頭発表会場よりポスター会場の方が賑わっていて、ポスター発表での討論とシンポジウムが主体だと感じています。口頭発表は別に無くても良いと思っておりませんが、口頭発表希望者は全員英語で発表する、等の口頭発表することの意義ができると、口頭発表がより面白くなるのではないかと思います。</p>
<p>今回は口頭発表が午前中でしたが、できれば午後にしてポスター発表の前にしていただきたいと思います。その方が口頭発表とポスター発表とも聞きにくる人が多くなると思います。</p>
<p>プログラム・要旨集・発表図表いずれも言語は自由でよいと思います。□          口頭発表については、今回の様な発表時間は短すぎるため、演者の方は発表内容が要点だけになっていたり早口で話してたりします。そのため聞いている方には内容が伝わりづらいです。発表時間を長くできないのであれば、いっそのこと口頭発表を無しにして全員ポスターでもよいのではないのでしょうか。</p>
<p>口頭発表やシンポジウムは英語セッション・日本語セッションを用意し、プログラムで明確にする。またポスターは初日は英語・他の日は日本語など来場者がスケジュールを立てて参加できるようにしたほうが良いのではないのでしょうか。</p>
<p>ポスター発表の討論時間をもっと増やす。</p>
<p>一般公演が並行して大量に行われているため興味のある公演をすべて見る事ができない。そのためできれば並行して行う公演を減らしてほしい</p>
<p>学部生から博士まで、研究内容のレベルにかかわらず、教育の目的でもっと口頭発表を増やして欲しいです。また、発表ノウハウや研究デザイン、異分野の基礎知識を提供する教育的セッションも増やして欲しいです。</p>
<p>最新で単独の重要な成果は、シンポジウムにはならないので、一般講演で討論・発表する機会がもっとも重要。</p>
<p>一般演題から採択するシンポジウムやワークショップを増やしてほしい。いつも同じようなシンポジウムが見受けられる。懇親会は若手が参加しやすいものを。</p>
<p>一般公演のレベルが低かったのと、発表時間の極端な短さが気になりました。件数を絞り込んで、まともなレベルのものを選択し、十分な時間の発表をさせてあげるといいと思います。</p>
<p>一般発表に関してですが、日本語で発表・討論を行っていても、ごくわずかしかフロアから質問がありません。英語オンリーにすると、恐らく座長だけが形式的に質問することになると思います。現状でもかなり沈滞しており、まずはそれを改善すべきだと思います。現状の大会での一般発表は、若手の研究者に悪い影響を与えているように思いました(レベルの低さ、沈滞した雰囲気)。基本的には「シンポジウム」「一般発表(口頭)」「一般発表(ポスター)」だけで良いと思います。</p>
<p>口頭発表は基本的に英語でよい。質疑は日本語でもよい。座長が対応する。</p>
<p>1年ではたいして研究が進んでないのに、仲間内の同窓会みたいなシンポジウムが継続して毎年行われているようなものもあるようにも思います。シンポジウム総数を制限して大会主催者側がその内容を吟味して、減らす努力をしていただきたいように思います。そのようにすればシンポジウム演題のレベルが上がると思います。また、主催者がspeakersを独自に選んで加えることなど、シンポジウムの質の向上があったらよいと思ってます。</p>
<p>口頭発表に選ばれた者はポスター発表を免除する。</p>
<p>シンポジウムを減らし、ワークショップを増やす。各ワークショップの演題の内、半数以上(できれば、7、8割)をポスター発表者から選ぶ。そうすれば、ポスター発表者のためだけの7、8分程度のあまり意味のない口頭発表は無くしても良いと思う。□          分子生物学会との合同開催の方が、学会自体口盛り上がり、望ましい。人とのつながり(交流)も生まれやすい。最低でも、隔年での合同開催を希望する。必要であれば、合同開催とは別に分野を絞った100から200人程度のgordon conferenceのような合宿(2泊3日程度)形式の会を年に数分野程度行うのも良いと思う。</p>
<p>(シンポジウムの比率と一般演題の取り扱いについて)          大きな学会の集会では、一般演題が全てポスター発表だったり、口頭発表の採択数が少なかったりして、研究内容をしっかり議論する機会が失われている。つまり、学生を含めた駆け出しの研究者が参加する意味を見出しにくくなっている。シンポジウムなどを行う研究者の研究は、論文などを見れば分るし、学会で殊更拝聴する必要はないと思う。現状では、一般演題の発表者は、お金を集めるために利用されているだけではないか、とすら思ってしまう。一般演題をすべて口頭発表にできれば、大変良い学会だと思う。</p>
<p>ポスター発表と口頭発表が共にある場合、口頭発表がポスター発表より前に有ると、良いと思います。</p>
<p>一般演題の発表時間が短すぎる。演題数を少なくして、一題あたりの時間を長めにするのがよいのではないかと。</p>
<p>シンポジウムの数を絞り込んで減らした方がよいと思います。演者や企画の優先順を決めるのは大変ですが、同じようなトピックスはまとめたほうが聴衆も集まるのでは。ガラガラの口頭発表会場は残念な感じです。</p>
<p>学会を口頭発表の場とするのがよいと考えます。一般講演の比重を大きくするべきだと思います。学会を勉強会とするのは問題だと思います。□</p>
<p>日本語による発表をきちんと欲しいと思います。</p>
<p>一般口演題をかなり増やして、学生、若い研究者に機会を与える。</p>
<p>一般講演とシンポジウムの比率:現状が示されていないので答えられない。一般演題の発表形式:ポスター中心でよいが、3分程度の口頭発表を全員が別室でやる。2012年の分子生物のやり方がよかった。</p>
<p>最近の学会では学生の口頭発表の機会が失われているのが問題だと思う。シンポジウムはその専門分野で世界を牽引する研究者に最新の知見を発表してもらい、一般発表は短くとも構わないので学生にも口頭発表できるように多くの演題をアクセプトするべきだと思う。</p>
<p>シンポジウム会場が満員で入室が困難、大きな会場が必要。シンポジウムを分野毎に整理し、4日間に分散させる。</p>
<p>ポスターも口頭発表も全員。口頭発表はポスターに先立ち短時間(スライド2枚以内)で要点のみ。言語は日本語を主体に。シンポジウムは対象(専門家?他分野?)を明確にし、流行ではなく萌芽的領域を大切に。懇親会は毎日、ポスター発表終了後、同会場(ビールとつまみ程度)。生化学受難の時代から真の分子の時代に回帰することを念頭に単独開催を。</p>
<p>・「一般講演とシンポジウムの比率」は大会毎に変えてよいと思う。</p>
<p>一般講演とシンポジウムが同時に開催するのはおかしい。人が分散して低調になる。</p>
<p>一般演題の口演は止める!十分な議論が出来ないから。</p>
<p>聞きたいシンポジウムの発表が重なって聞けないことが多いので、シンポジウムの発表についてもポスター発表する。</p>
<p>一般講演の各講演時間はかなり短いため、ポスターのアブストラクト的な位置づけになっています。そこで、発表時間の短いポスターアブストラクト(ポスター発表も行う)に加えて、ミニシンポジウムの様な一般講演を新設するのはいかがでしょうか。ミニシンポジウムの様な一般講演は、若手研究者が日本語で企画することを推奨し、シンポジウムは(もちろん若手の応募も歓迎しつつも)各分野の第一線で仕事を出されている先生が最先端の仕事を紹介する場として考えればよいと思います。□          また、特別講演につきまして、分野を作ってきた大御所の先生方が、苦労話なども含めて研究人生を語ってくださる場になるとうれいです。その場合、初めて学会に参加するような学生にも気軽に聴いてもらえるよう、日本語で、裏話等も交えた講演をお願いできるとよいと思います。</p>
<p>基本的に一般講演だけにして、オリジナルデータについて議論する。既に発表されている内容である特別講演やシンポジウムは必要がないと思う。若手に口頭発表の機会を与えるべきである。発表は日本語でいいと思う。英語では負担に感じる方が多いのではないのでしょうか。</p>
<p>わずか数分の口頭発表の寄せ集めは聞く側からすると、得るものが少なく時間の無駄でした。無理に口頭発表を増やす必要はないと思います。</p>

<p>口頭発表はポスターのアブストラクトから優れていると思われる物を選抜する。選抜に関わる委員の名前を公表し、透明性と公正性を維持する。□</p> <p>生化学会から積極的に働きかけて米国Experimental Biologyのような複数団体の共同学会を春と秋の2回開催する。学生や若手が視野や人脈を広げるのに有効である。複数回開催することで授業などの衝突を避ける。□</p> <p>英語化することでアジア諸国からの更なる参加が期待できる。留学生などの勧誘にも効果がある。地方支部大会や分科会を日本語とし、本大会を英語にする。</p>
<p>聞きたいシンポジウムの時間が重なっていることが多いため、同じ時間に複数行うのをもう少し減らしてほしい。□</p> <p>昼食後の1時間程の空き時間がいらぬような気がする。</p> <p>希望者は高口頭発表をさせてください。</p>
<p>問4,5: 一般講演あるいは一般演題として口頭発表の場をできるだけ多くしてPI未満の若手の発表機会を増やすべき。</p> <p>問5、できるだけ口頭発表を増やすが、入りきらない場合はポスターにする(プログラム委員が決める)。</p> <p>一般講演は時間が限られていて内容の紹介に終わることが多いので、できるだけポスター発表の前に行うのが良いと思います。ポスターでもっとDiscussionができると思います。タイトルは日本語と英語、要旨は自由、発表図表は英語が良いと思います。</p>
<p>日本の学会であり、若手の育成(英語の練習・育成ではなく、科学者としての育成)に資するためにも日本語で発表できるようにしておくことは必須と考える</p> <p>英語化は必要ですが、現状ではすべては無理のように思われる。英語セッションを別に設けて、それ以外はどちらでもよいようにしては?あるいはシンポジウムは英語、一般演題はどちらも可とする。</p>
<p>昨今の流れで英語での学会運営が多くなっており、国際化の観点からは重要であることは承知しておりますが、国内の大会ですので、日本語での密な議論を重視すべきではないかと思っております。英語でのシンポジウムは、日本語でのシンポジウムほど盛り上がっていないという現状も鑑み、発表形式を英語に統一することは、若い大学院生などの学会参加への魅力を低下させる要因となる可能性を感じます。</p>
<p>国内学会であるならば、日本人なので日本語でないと議論は深まらないと思います。国際学会にするならば、英語にするべきだと思いますが。</p> <p>問7: 論文発表は英語が事実上の公用語ですが、日常的に英語で思索し議論している研究者は少ないように思います。若手研究者の英語力が格段に上昇するような時代の変化が訪れれば、完全英語化も良いと思いますが、現状では研究内容に関する議論の質が低下するのではないかと懸念します。</p>
<p>日本国内の学会は日本人同士で議論する貴重な場ですので、全て日本語で行うべきであると考えます。□</p> <p>最近、全てを英語で行う学会も増えてきていますが、学生が全く議論に参加できない、英語が理解できても議論の質が低下する、という問題が生じてきています。国内学会は国際学会で発表するための練習の場ではなく、貴重なサイエンスの発表の場であるということを再確認していただきたいと思っております。</p>
<p>問6: プログラム(タイトル)英文和文併記、要旨は自由、発表図表は英文(海外参加者のため)</p> <p>問7: 学生だけは言語自由。ポスター以上は英語。討論は自由。</p>
<p>シンポジウム、ワークショップ、一般口頭発表、ポスターすべて言語は自由、ただし日本語が望ましい</p> <p>言語はそろそろ、生化学会も分子生物学会も発表についてはすべて英語に切り換える事を考える時期であるとおもう。</p>
<p>要旨・プログラムの言語は日本語にした方がよい。理由は2点です。日本語で文章をかけない学生が多くなっていること。また、日本の特徴として、論文に発表されていない結果を学会発表することが多いため(学生の教育の観点から仕方ないときがある)、英語で要旨を書いてしまうと、海外のグループに先を越されてしまう可能性があるためです。□</p> <p>口頭発表する機会が近年極端に減ってきているので、学生に口頭発表をする機会を提供して欲しい。</p> <p>もう日本語だけでいいと思います。英語の必然性は全くありません。また、学生の口頭発表の機会がなく、学会がその役割を果たすべきです。</p>
<p>プログラム・要旨集・発表図表の言語について□</p> <p>プログラム・要旨集は自由(要旨を英語で書きたくない場合もあります)□</p> <p>発表図表は英語(言葉が分からなくても何となく意味が伝わればよいような気がします)</p> <p>現状維持を希望します。□</p> <p>年齢によっては、今から英語言語能力を開発するのは困難です。□</p> <p>大会では特に異分野で非常に多くの意味ある刺激を持ち帰ります。英語の理解・使用能力によっては(少なくとも私は)半減以下になります。</p>
<p>問6: プログラムは英文と和文の両方、要旨と発表図表は英語。</p> <p>問7: 英語の訓練なのかサイエンスの討論なのかがかみ合わないケースがあり、英語の口頭はポスターから選択するのではなく発表者が選択する方がよい。シンポはこれまで通りに英語を推奨し質疑は座長判断。</p>
<p>問7について、国内の学会という位置付けであるならむしろ日本語に制限すべき。年会の国際化を狙うなら英語にすべき。要は学会のスタンス次第と考える。研究者は他に色々な局面で英語を使う機会があるので、「研究者には英語が必須だから」ということを理由に国内学会でも英語を強要するのはナンセンス。それよりも英語対策のプログラムを充実させる方が目的に叶っているのではないだろうか。</p>
<p>問6: 国際化を推進する必要があるとは言え、国際会議ではないので基本、日本語でよい。必要であればプログラムは和文・英文並記とする。□</p> <p>問7: 問6同様、あくまで国内学会なので日本語。</p>
<p>ポスター、発表は原則として日本語が良いと思う。英語で行なうのを選択にすればいい。</p> <p>国際シンポを設定してそれは英語でやるのはどうか?</p> <p>ほぼ日本人しかいないので、理解し易い日本語で全てやるのが良いと思います。</p>
<p>英語で発表するという事は大事であろうが、ほとんど日本人であるのに日本語の発表を不可とするのはどうであろうか。実際、日本語でのディスカッションは活発であるのに、英語では急に不活発になるという事実を目を向けるべきである。</p> <p>発表・要旨の言語については、本学会を海外の多くの研究者が参加できるようにしたいという意図があるかどうかに関わっており、その意図が強ければすべて英語にすべきと考える。学会運営の方向性を先に問うべきでは?</p> <p>発表を英語にすると質疑応答が不活発になるので、義務化するのはやめて欲しい。</p> <p>発表の英語に関しては、せいぜい題名は英文を併記する程度で十分でしょう。無理に英語を取り入れる必要性は感じないし、そうするとさらに演題数の低下を招く恐れがある。</p>
<p>発表時の言語を英語に限定すると、学部学生にとってなってしまう発表の敷居が高くなってしまおうと思われず</p> <p>言語は学生の参加も考えて、全て日本語にすべき。</p> <p>発表、プログラム、要旨集すべて日本語が良いと思います。</p> <p>言語は日本語が良いと考える。巨大な学会であり、いろいろな分野の講演が多数ある。興味本位で講演を聴く際、英語表記だとわからないことが多い。英語の表記、発表はもっと分野のせまい学会で行えばよいと考える。</p>

大会を見ていると、日本語の会場に比べて英語の発表会場では聴衆が明確に少ない。どちらかに限定するのではなく演者によって言語が異なっても良いのではないかと思います。国際化ということで英語の講演を増やして来ましたが、それと反比例するように学会出席者が減少していったように感じています。また内容を限定した専門的な各種集会在盛んになってそちらに人が流れて、大会出席者が激減しているといわれています。それも主要な要因の一つです。しかし大会が専門別になれば、異分野に全く関心を持たない狭い研究者しか育たなくなるのを懸念します。国際化を叫び、英語偏重に墜してしまわず、異分野の研究者も講演が聞きやすく、興味のあるものにすべきだと思います。生化学会大会がこれほどまでに凋落したのはとても残念です。今年の分子生物学会も明らかに凋落が見え出しました。ぜひ議論を重ねて再生してください。
発表言語は英語が望ましいとは思いますが、負担が増すと発表自体を敬遠しがちになりそうなので、個々の研究室の方針などに任せられる自由度があって良いと思います。□
懇親会は、だいたい知り合いの先生で固まってしまい、若手や新しく分野開拓のためにその道の先生とお話がしたくて参加した人にとっては、その場に居づらい雰囲気があります。そんな会なら特に開く必要はないと思います。若手による斬新な企画などで、もっとコミュニケーションがとりやすい雰囲気になってほしいと思います。
問6に関して追加コメント：過去に一般講演の要旨を英文で提出した年会有りましたが、当時意識せずに未発表の内容（ある蛋白質の構造解析の結果）を記載したところ、我々が論文を投稿する前（学会数ヶ月後）に、欧米のグループからほぼ同じ内容の論文が出されました。英文での要旨作成を必須とする場合、このようなケースが増えるのではと危惧します。□
「日本生化学会大会の一般講演の要旨は英文に限定しない（英文で要旨をアピールしたい研究者は英文で書いて可）」が宜しいと思います。
プログラムは英文、和文併記。要旨と発表は自由。
プログラムや要旨は原則日本語で英語も可としたらいかがでしょう。□
大学や大学院の講義が生化学会の開催日程と重なる場合は、対応に非常に困っています。できれば、学会開催は夏休み期間中、できれば9月に開催できないでしょうか。
問6、問7 について、なぜ、国内で行われている学会で英語を使わなければいけないのか判りません。内容をきちっと把握しようとするれば、母国語が一番なのではないでしょうか。□
問9 について、合同開催する意味、あるいは理由とはどのようなものなのでしょうか。
問6に関して 登録用要旨は自由、印刷用要旨は英文で、またそれ以外は英文で
討論が英語になって、活発な議論が難しい場合もあります。日本薬理学会年会のように、英語と日本語を選択できるようにしてはいかがでしょうか？□
優秀発表賞は、学位未取得の研究者などが応募できないので、年齢による条件を加えて欲しい。
悲しいかなプログラムが全て英文ではお目当てを探すのにも時間が日本語よりもかかります。日本人が現状ではまだ圧倒的に多いので、英語版も日本語と両方用意するのは難しいようでしたら、注意事項や最低限必要なところは英語でも記載して頂いた方が、日本を主に対象にして下さっているのであれば有難いです。要旨は日本語もあれば有難いですが全て英語でも両方書くよりは頁数の関係や皆さんの負担も少なくてよいのかとおもいました。
生化学会はかなり幅広い分野が集まっているので、全て英語にしてみると、自分の分野以外のものへの壁ができてしまう。要旨もぱっとみてわかりやすいのは日本語ですね。
言語に関しては、記録に残る要旨などは英語がベターとは思いますが、発表数が多い中で英語の要旨では聞きたい発表を探すことが難しいので、字数は今の半分程度にして、英語と日本語の要旨両者ではいかがでしょうか？
使用言語の問題は、学会がどの方向に向かうかに依存します。日本人研究者の国際化や英語力向上を目的にした学会の英語化はお勧めしません。それは学会がやることではなく、各大学あるいは各個人がやることです。□
日本人の研究者や学生に深い議論をしてもらうことを第一目標にするのであれば、完全日本語化に徹底すべきでしょう。深い議論が出来るレベルで英語のできる学会員など5%に満たないでしょう。また、資料（タイトル、アブスト、ポスター、スライド）についても、日本語とそん色なく認識・読解できるレベルの学会員も1割程度でしょう。活発な科学的議論に英語は要りません。むしろ障害にしかありません。□
一方、海外（特にアジア）から研究者や学生を引き込むことが第一目標であるなら、完全英語化（タイトル、アブスト、発表資料だけでなく、会場内の全ての案内なども）にするべきです。外国人は、少しでも自分が理解できない言語が会場に存在すると、想像以上の阻害感を感じるものです（異国に行って、母国語と英語以外の言語で書かれた看板や案内を見て不安に思うことを想像すれば容易に分かることと思います）。
上記2項目は二律背反であり、両者を同時に選択することはできません。両方の良いところを取ることはできず、中途半端な英語化は両方のデメリットばかりが大きくなり、結果として、長期的には益々の学会の衰退を引き起こすでしょう。完全日本語化か完全英語化、執行部で学会の進むべき道を選択し、覚悟をもってどちらかに絞るべきでしょう。□
もう一点付け加えれば、論文を読めば済むようなレクチャーやシンポジウムは少ないにこしたことはありません。それよりも、未発表のデータに触れられる一般演題に力を入れるべきでしょう。本来学会とは、新しい（まだ発表されていない）知見についてお互い議論をする場であり、既に発表された知見を講義する場ではありません。立派な業績を講義したいのであれば、大学の特別講義で話をすれば良いだけのことです。
問6 発表図表は英語、他は自由
情報収集の場でもあるという目的からは、英語でのプログラム、ポスター発表は効率的ではないと思います。英語能力を養うのはまた別の機会をもてばよいのではないのでしょうか。もちろん日本語のわからない方々への配慮は必要ですが。
日本の学会ですから発表言語は日本語が良いと思われます。ただしポスターまたはスライドともに英語で作成することを義務付けるなど、英語しか理解できない方々に対する配慮も必要です。
英語のみでの発表や議論はやめたほうが良いと思います。□
メリットもあるでしょうがデメリットも大きいと思います。
問6:プログラムは日英併記、要旨英文、発表は自由だが図表は英語。
問6 英語の比率を上げるのは国際化に役立つが、demeritもある。読み書きに英語の方が時間がかかる人にとっては、生化学会は演題が大変多いのでプログラムなど目を通すのに時間がかかり過ぎる。英語の比率を上げ過ぎると会員数が減りませんか。
言語は日本語で、教授から学生まで真剣な深い討論できる機会を設けてはいかがでしょうか？英語の導入で不十分な討議や、一部の先生だけが質疑する場面が増えます。言語も大切ですが、科学的な思考や科学者としてのコミュニケーション能力を実践する場としての“日本”生化学会であってほしいです。
日本人の思考は日本語で行うもの。日本語でこそ議論が深まる。研究の本質を見失うべきではない。
ポスター会場で、英語で議論される場面をほとんど見かけない。外国からの参加者が日本語で話し合っている場に、英語で割り込むことはためらうと思う。□
かと言って、学部生に英語でいきなり発表しろというのも難しいので、ポスターも日本語（学部生）エリアと英語エリアに分けてはどうかと思った。英語エリアでは一切日本語禁止で。
英語限定のセッションがあるのは賛成だが、プログラムが英語だと面倒。現状では英語に偏重することの弊害の方が大きいと感じる。
プログラムと要旨集は和文と英文の併記がよい。
国内学会なのだから、日本語にすべき
プログラム・要旨集は英文と和文の併記。発表図表は英文を指定する。
国際セッションを英語にして、ほかは日本語。

プログラムは英文・和文併記、要旨と発表図表は自由
プログラムの言語は、日本語も入れて欲しい。新たに興味を持った分野のタイトルが英語だけでは理解しにくい。生化学会はいろいろな分野の人たちが集まる巨大な会なのですから、それを生かすようにして欲しい。異分野の講演を聴く必要がないと判断されるようでしたら、分野を限定した会にすればよいと考えます。
日本の大会で英語は必要ないと思う。英語にするなら、国際大会で外国人を呼ばないと、日本人同士でもどかしい英語の議論は虚しいものがある。
現状、英語口頭発表では参加者が減少すると考えます。しかしながら公用言語英語は黒舟でありそれなりの準備が必要と考えます。
日本人が多数の学会で要旨やタイトルまで英語である必要があるか疑問
問6-7の学会の言語につきましては、「将来的には英語にしていくべき」と思いますが、一気に全て英語にしてしまうと、敷居が高く感じてしまう人も多いと思います(特に学生にとっては)。若手の研究討論への積極的な参加や、異分野の話聞く意欲を多少阻害してしまうことも懸念されると思います。大会は「研究について議論する場」であると思いますので、これの妨げにならないよう、徐々に英語化を進めていくべきと考えています。例えば、発生物学会では、数年前から大会の言語が完全に英語化されましたが、その一方で、大会の前日に若手中心の日本語のサテライトワークショップをやる(かつ、若手中心と言えど、ベテランの先生方も議論に積極的に加わって、若手のモチベーションをあげる)などの工夫がなされています。
プログラムと要旨は日本語(少なくとも日本語併記)がよい。専門外の演題を眺める際に圧倒的に見易い。英語では、専門に近い演題でない目に留まりにくい。
英語を主要言語として発表するならば、無理しても欧米の学会で発表の方が有益に思える。
プログラム・発表言語は日本語でよい
国内学会で学生の発表練習も兼ねている場合が多く、また発表分野も多岐にわたるため、あまり英語発表にこだわりすぎない方がよい(一部シンポジウムは英語でもよい)。誤った英語では、内容がわかりにくい。全般的に、口頭発表の時間が短く内容が浅い場合があり、できれば長くした方がよい。ポスター演題数はやや多すぎるが、現状では変更が難しいかもしれない。全般的に学問が異分野融合型になっているため、なるべく毎回色々な学会との合同開催にし、生化学会としての単独開催にこだわらず、異分野交流を奨励した方がよい。
【問6:プログラム・要旨集・発表図表の言語】基本的に自由(日本語以外も可)とし、英語以外の言語を選択する場合にはかならず同じ内容を英語で併記する、というほうがよしいと思います。#日本で習得者の少ない言語の場合に内容のチェックが煩雑となる不具合はありますが、名前入りの文章ですから、英語でないほうの言語で、おかしな内容を書くことは、ほばないでしょう。
英語の必然性は変わらないと思うが、学会で英語前提は国内の学会において意味がない。必ずしも英語堪能な研究者がレベルが高いとは言えない。かえって、英語が増えてな若手研究者が研究の詳細についてこれずにレベルの低下を誘発する。一部に英語のみの討論ができるカテゴリーを設ければ十分と思われる。
プログラムは英語と日本語の併記、発表図表は英語でない、外国人が理解できない。
言語について
プログラムは和英併記、要旨と発表図表は自由とし、原則日本語、希望者のみが英語を使用するのが良いと考えます。新しいこと・複雑なことを理解するには、母語の方が効率が良いものです。個々の演題に集中できる小規模学会ならともかく、多方面・多数の発表を巡回し情報収集を行わなければならない生化学会では、一演題に割く時間と集中力を最小限にとどめたいため、特に異分野の発表は日本語が理想的です。生化学会には若手の訓練の場という側面もありますが、日本語での作文・作図も心許無い段階での英語発表の効果には疑問があります。また、国内学会の日本人の英文要旨や英語ポスターには、文法に問題があり理解が困難なものもしばしば見受けられます。英語力がネックになって情報が正確に伝わらない事態は、発表者と聞き手の双方にとって好ましくありません。生化学会では、背伸びして英語を使うより、日本語で確実かつ活発な情報交換を行う場であって欲しいと願っています。
プログラムは英語と日本語の両方を選択できると便利だと思う。
日本人同士が議論を深めるには、日本語が最適であるため、現状の開催状況で使用言語を英語にすることは、学会の質の低下につながると思われる。学会の国際化を図るのであれば、2年に一度国際会議として開催すれば良いのでは?その際、海外の学会と合同開催にすると良いのではないのでしょうか?
プログラムなどの言語もすべて自由でよい。実際問題、これは国内の学会であって、参加者もほぼ日本人である。
大会で英語を使用することによって発表者・質問者とも言いたいことがきちんと言えない事態になっている。サイエンスの討論をするための学会で、意図が伝わらないのでは英語を使用する意味がない。学会は英語の練習の場ではないとおもう。
ながく学会会員ですが、参加したことは無い。日本語で十分だと思います。英語にする必要がわかりません。英語に全てしたいのならば、アメリカの関連学会の支部に日本の学会をしてしまった方が効果的な気がします。
問6:全部英語ではハードルが高すぎる。自由選択にしてほしい。
発表言語等:せっかく日本で開催しているのに、英語にする必要はまったくない。日本語のプログラムの方が(英語は得意でも)随分と読みやすい。国際的に通用する若手を育てる意味で英語発表を義務づけるのは意味が無い。免疫学会が英語発表のみだが、若手は満足に質疑応答もできず、力がつかないばかりか、聞いてる方も「お遊戯会」を観覧しているだけで時間の無駄になる。
国際学会ではないので英語でやる必要は無いと思います。学生が多数参加しますが、日本語の方が理解が深いので。
・発表言語は、「日本語」が良いと思っています。英語が日本語並に話せる先生は限られていますので、折角の専門的なディスカッションの機会を表面的なモノにするのは反対です。英語での発表・ディスカッションは、国際学会に出席すれば良いので、日本国内の生化学者の集会を英語発表にすることはデメリットが大きいと思っています。
(6)現状のように、発表・討論ともに英語(シンポジウム全てとワークショップの一部)と発表・討論ともに自由(ワークショップの一部)とする。
言語は、日本語か英語を選択できると思います。海外の演者は英語で書いてもいいと思います。英語に縛ると、学生の参加が減少するのではないのでしょうか。
プログラム・要旨集・発表図表全ての言語は自由に決めてよい。特に離れた分野においては英語の用語がわかりにくい。内容を伝え興味を持ってもらうのが主旨であり英語に特化する必要はない。基本的に日本語とし、英語併記でよい。
プログラムは、膨大な情報の中から、興味のあるものを見つけるので、日本語の方が良いです。要旨を和文、英文併記にして、電子版は英語・日本語両方のバージョンを作ると良いと思います。
プログラムは英文でよいのですが、和文を併記していただいた方が、読む時間を短縮できてよいと思っています。
無理に英語にせずとも日本語でよいと思います。このような制限を設けると更に参加者は減ります。
言語は日本語にすべきです。スライドやポスターの中に英語が混ざるのは構わないですが、基本は日本語にすべきと考えます。
要旨は英文が望ましい。海外からの参加者はどのくらいあるのか?□
発表及び質疑応答を細部に配慮して行うには日本語が望ましい。ネイティブが質問するのであれば、一定の意味はある。
(発表言語について)
すべて日本語で良いと思う。現在の日本では、国際化を叫ぶ声が吹き荒れているが、通常の会話を日本語でやる日本人が、研究を議論する際に英語でやると知能指数が10分の1以下になり、ほとんど議論の意味をなさない。研究の集会には、英語を上達させに行くのではないから、日本語でやるべきです。外人と議論したい人は、海外の国際学会に参加すればよろしい。
生物物理学など、全て英語で発表することになったが、何を考えているのだろうか???
問6と問7について:本大会は日本人の参加が大多数を占めるため、日本人への情報発信を主眼に入れた形式が妥当と思う。発表言語は日本語でも英語でも自由とするが、発表演題には英語も併記したほうが良いと思う。日本語圏外の参加者にも考慮して、発表スライドやポスターは基本的に英語表示(または日本語+英語併記)にするのが外国研究者には親切だと思う。
参加者のほとんどが日本人なのに英文要旨や英語発表は無意味。英語にこだわるのであれば国際学会として運営し、全てを英語でやればよい。そうでなければ日本語による運営と発表が適当。そもそも、討論が不活発なのに英語で発表討論など論外ではなからうか。
生化学会と分子生物学会では、参加者の背景が異なっているため、同じ演題に対しても、質問される内容が違ってきます。これが、何年間に一度は合同開催でもよいですが、単独開催をする必要性であると考えています。
口頭発表はすべて英語で行う。シンポジウムは勿論です。

図表の言語は英語で良い。しかし、発表は日本語で行ってほしいです。分野が少しでも異なると、英語では理解できないからです。それに、英語の発表を完璧に理解できている人は少ないと思います。小保方さんの英語で書かれた博士論文の偽証を、見抜けなかったではありませんか？無理に英語を使用することはないと思います。日本語で発表してほしいです。
一般講演は、学生が発表できる貴重な機会でもあり、まずは日本語で討論する能力を養うことが重要だと思います。特別講演やシンポジウムはできるだけ海外からの招待講演を増やし、英語でやれば若手の刺激になります。母国語で物事を深く思考することができる世界的にも稀有な環境を喪失することには反対です。
使用言語に関しては、英語の使用が望ましいのですが、現実的には参加者が日本人だけならば日本語を使用するしかないでしょうか。参加者の平均的な英会話力は、通常のディスカッションをするレベルに達していません。留学生がポスターで話しかけられても、相手にしてもらえないということも聞いております。
日本で行う学会で、参加者のほとんどが日本人なので、言語は日本語でいいと思う。
プログラムと要旨は自由、発表図表は英語
発表およびプログラム、要旨ともに日本語を基本とし英語でも可能にする。
正直、多くの今の若い人の英語はひどく、英語で発表すると内容の理解と特にディスカッションが非常に上滑りしていると感じている。これでは若い人がわざわざ学会に行く意味が随分減少すると思うので、スライドとポスターは英語で作製してもらって、発表とディスカッションは日本語が良いと思う(留学生とかはもちろん英語でOK)。生化学会は日本語でじっくりディスカッションできる学会を売りにすれば良いと思う。国際化という名のもとに、若い人の深い理解や学問的成長がないがしろにされているように思う。
日本学会だから日本語でいいと思う。英語で発表したい人がいればええ後でしても構わないが。
発表時の言語については、日本人研究者の参加がほとんどである現状では、プログラムのみ英語日本語併記、要旨と発表図表は自由の方が良いと思います。
いくらグローバル化が求められているとはいえ、ほとんど日本人なのに英語で発表する意義が見出せない。
プログラムや要旨集についても日本語でも構わないと思います。
ポスター 要旨ともに英語表記にすべき。発表討論は自由で良いと思う。
プログラム・要旨集は日本語、発表図表は自由
英語は必要だと思うが、若手の壁になりうる。□
特に学部生などは発表をするのも聞くのも避ける傾向が現れると思う。
プログラム・要旨集・発表図表の言語は、海外からの参加者を増やしたいのであれば、英語化すべきだと思う。ただし、そうでないならば、日本語で良いと思う。
発表言語に関して、要旨、発表の図表は英語にすべきだが、タイトル、発表者、所属に関する情報は日英両語併記とし、検索が日本語でも出来るようにすべき。同音の氏名の多い日本では、英語のみの氏名標記だと、検索で不要な候補が挙がりすぎる。
学生に容易に理解し興味を持ってもらう目的や、異分野の内容でも簡単に理解できるようにするため、日本の学会なのだから(国際学会ではないので)、日本語のプログラムや要旨は必須と思う。
要旨や討論は、日本語で統一し、母国語で深く討論するべきと考えます。
プログラム・要旨集・発表図表の言語については、プログラムは日英併記とし、要旨集、発表図表は自由とするのがよいと思う。
・「プログラム・要旨集・発表図表の言語」、要旨は英文としてJBにプロシーディングとして掲載するのが良いと思う。
要旨は日本分子生物学会と同様、英語を基本として、日本語発表演題は日本語要旨も提出する様にしては如何でしょうか。また、発表時も、日本語セッションと、英語セッション、日本語/英語セッションと分けてプログラムを組んだ方が良いと思います。ポスター発表は使用言語はどちらでも良いが、ポスターはなるべく英語で作成頂くようにすればよいと思います。
発表は日本語で行うべきです。グローバル化=学会を英語化することとは違うと考えます。日本は日本語で科学を語れる数少ない国であるからです。
問6：プログラム・要旨の言語は英語と日本語の両方を並記し、発表図表の言語は発表時に選択した言語に合わせる。
議論を活発にし、他領域も含め理解を深める為にも、学問を母国語で行える事のメリットをもっと生かすべきだと思う。また研究を世の中に広めていく上では母国語で学問が出来る事は必須で、英語で学問をするという今の風潮はかえって学問をする人を狭めているように思う。
問6、問7： プログラム→日本語と英語を併記。 要旨→日本語(英語でも可)+数行の短い英語での要約。(冊子体の要旨集は不要。) ポスター発表・口頭発表→共に日本語で可。(タイトルのみ英語必須。)
全てのプログラム、発表、討論時の言語は全て日本語でよい(ただしシンポジウムに限ってはそうではない)
プログラム、発表とも日本語にすべきだ
学会は新たな情報を得る場でもあると考えます。プレゼンによってはスライドがめまぐるしく進む場合もあり、英語ではフォロー仕切れない場合も出てきます。従って言語は母国の日本語でよいのではないのでしょうか。英語にするのであれば国際学会にでも名称を変更すればよいのではないのでしょうか？
英語にこだわりすぎていませんか？
プログラムは英文・和文両方、要旨と発表図表は自由。発表時の言語は自由とし、口頭発表では使用言語を登録する。
国際学会は別にあるため、国内の学会である本会における日本人の発表言語は日本語のみでいいと思います。
発表時の言語は、発表、討論ともに日本語を原則とするべきである。
問6,7 シンポジウムは英語、一般演題は自由。□
日本生化学会を交際競争力のみを目指す学会にしたいのでしょうか？日本の生化学を広くカバーすることは必要ないのでしょうか？小さい専門分野学会の□が乱立するなかで、会員数の減少など厳しい問題点が山積しているのは承知しておりますが、日本の生化学のすべての領域をカバーし、統合できる機関は必要かと思えます。
発表は英語でできても、討論が英語でできない人が多いです(聞き取りの問題で)。現状では、討論を英語にすると、議論が深まりません。討論を英語化できるのは、もう少し先のことと思います。
問6、問7に関連し、とりとめのない学会の英語化を憂慮している。年次大会、特に一般講演は国内の学術振興・交流に最大価値をおくべきである。自身と異なる研究分野の発表を聴講・討論する場合、あるいは逆に発表する場合、参加者の圧倒的多数が母語とする日本語のほうが互いにメリットが大きい。国際化に対しては、年次大会では1/3程度のコマ数のシンポジウムの英語化で対応し、さらに一般会員の英語化を促すのであれば3~4年に1回、全英語化した国際学会を開催したらよいと思う。
プログラムは日本語と英語の両方用意。要旨の言語は自由であるが、発表言語が日本語でもポスター・スライド中の文字は英語を原則とする(プログラム中タイトルとポスター・スライド言語が英語であれば非日本人でもかなり内容を把握できる。日本語併記は可とする)。現在の日本人の平均的英語力および参加者の日本人率を考えれば全て英語にするのは不適当。
学生、院生にとって参加しやすい形式を求める方向性を希望します。英語の要旨、英語の発表を義務付けても、実質的な討論はかえって貧弱になるのではないかと危惧します。英語の必要性を感じた人は言わなくてもトレーニングします。

<p>目的もわからず、発表や要旨を英語にするのはどうかと問われても、答えようがないです。英語では検索の効率も悪いし（日本人ですから）、投稿に際しての手間も増えます。そもそも人名での検索に時間がかかり、非効率だと思います。また投稿に際して、ポスドクや若手レベルでも相当の世話が必要だと思います。外国からの参加者がどの程度なのかもわからず、英語にする理由があるのかすらわかりません。英語にするのであれば、その目的をはっきりさせるべきだし、理由を書いて質問すべきではないかと思います。単に英語にすると言われても日本語の方が便利ですしと言いきりやががありません。当方のラボではポスドクなど海外から来ている人もそれなりにいるので、セミナーは全て英語ですが、それと冊子を全て英語にするというのはちょっと話が別のような気がします。逆に英語にするのであれば、全部一気に英語にすべきです。混在は面倒なだけです。</p> <p>「日本生化学会」なので日本語を使用すべき。しかし、英語話者の参加状況も踏まえて、ポスターやスライドの言語は英語表記にし、ポスター発表者は英語での発表もできるように準備するのがベストだと思う。</p> <p>今回参加していないので現状の問題がわかりません。会員に問題点を伝えてからアンケートをするのが効果的かと思います。学会では日本語を活用すべき。</p> <p>内容のある質疑応答を考えると、日本語での要旨、発表が必要と考える。シンポジウムはある特定の領域が指定席のように繰り返される感があり、改善の必要ありと考えます。</p> <p>日本の生化学を発展させるための学会ですので、多様な分野間の情報交換の効率を高める必要があります。そのためには日本語での口演、日本語でのポスター発表が必須です。分子生物学会での経験からすると、英語化することにより、学際的な情報交換は確実に阻害されます。ポスターをみてもプログラムを見ても、ざっとみて違う分野での興味深い発表をみつけられなくなってしまっているからです。異分野交流が是非とも必要な現在、ぱっとみて内容がわかる漢字を含むポスター、プログラムは是非とも活用しなくてはなりません。英語の教育とかいろいろいう方もおられますが、現在の学生の英語力は格段にあがっています。あえて学会で大リーグボール養成ギブスをつけて情報交換するのは、おもりをわざとつけて100メートル競走にのぞむようなもので、愚かです。発生物学会、分子生物学会とこうした愚かな英語化をおこなっているうちに、学生、研究者の能力は確実に損なわれています。生化学会がそのようなことにならないことを望みます。また、英語については現在は、Google検索などを活用して論文も書くようになっており、大学でもカリキュラムが格段に改革されています。学生の能力もあがっている現在、学会で英語でのプレゼン教育をする必要はもはやありません。□</p> <p>□</p> <p>分子生物学会は今や大きくなりすぎており、生化学会との共催をしづることも多い現状です。それ以外の学会との共催ももっと増やすのがよいと思います。</p>
<p>問6: プログラム・要旨集・発表図表の言語</p> <p>日本生化学会ですので、プログラム・要旨では日本語でよいと思います。発表図表の言語は日本語、英語いずれでもよいと思います。</p> <p>日本人が大部分を占める学会なので、要旨も発表も日本語でいいのではないのでしょうか？外国人とディスカッションする場合は、英語を使えばいいと思います。</p>
<p>懇親会は形式張らずに誰でも参加しやすくする。</p> <p>懇親会について、ポスターセッションの後に軽く飲食しながら議論を続けられる時間を設けてはどうでしょうか？ポスター発表がある日は、毎日開催することになりますが、一部の人のみ参加する懇親会よりは、人的な交流は広がると思います。</p> <p>問8□</p> <p>単なる同窓会的な目的でなく人的交流の活性化を目的とするならば、研究分野別や実験手法別、モデル生物別、あるいは、修士以下の学生、博士課程の学生、ポスドク、助教、准教授以上などの立場別のように、何かしらの共通項のあるグループ分けをするとよいと思う。グループ分けの切り口を（グループ分けなしの現状形式も含めて）数年おきにローテーションしてはどうか。共通の話題さえあれば初対面の人同士でも交流の意義が生まれると思う。</p> <p>問8: 全体の懇親会はセレモニー化しているので不要、むしろ企業協賛方式で飲食ありのアカデミックな夜のより踏み込んだ内容でパネルディスカッションや自由な意見交換のセッション(個別テーマで)にした方がよい。</p> <p>懇親会は学生にとっては知り合いも少なく、夜に現状のような開催方式で参加するにはハードルが高く感じます。ランチやコーヒブレイクなど参加しやすい形を導入すると共に、懇親会は大会の終了を皆で実感するためにも、最終日の夕方から表彰なども含めて2時間程度で行うのはいかがでしょうか。</p> <p>問8に関して、 ポスターセッションに引き続き、ポスター会場でミキサー(アルコール適量まで可)を行う</p> <p>懇親会はえらい先生方の集いのような感じを受けている若手が結構いると思います。シンポジウムやワークショップを開催され、発表された先生方は少なくとも出席しているんだという認識を持れば学会会場では話できなかった人たちも足を運びやすくなるのではと思います。今後の研究を若手が担っていくとといけないので、若手が参加しやすい懇親会でないともあまり意味がないのではないのでしょうか。</p> <p>・比較的大規模の学会のため、懇親会は開催しないという選択肢も良いと考えております。(絶対的には異分野が多くなるため、"個人的な懇親会"の方が効果的と思っています。)</p> <p>懇親会は若手が大勢参加するように工夫する。</p> <p>懇親会場はひとつである必要はないと思います。□</p> <p>従来通りの開催形式であれば、懇親会場を幾つかにコマ割りにして、参加者が意見交換しやすいよう調整するとよいのではと思います。</p> <p>懇親会について。□</p> <p>雰囲気の問題。学生が参加しづらい。□</p> <p>海外からのゲストと交流を持とうとする人が少ないのも残念だった。□</p> <p>企画も大事だが、皆で和気あいあいと懇談しよう、という意識が大事なのではないでしょうか。</p> <p>懇親会は、初日ではなく、中日でも良いと思う。</p> <p>懇親会はミキサーでよい</p> <p>懇親会は、今まで参加したことが無い、また、周りに参加したことがある人がいないので、どのような方が参加していて、どのような雰囲気であるのかが全く分からないため、参加をいつもためらってしまいます。</p> <p>お疲れさまです。懇親会について現状でよいとは思いますが、若手による企画など変化もあってよいと思います。□</p> <p>他学会との合同開催については、国内の学会だけではなく、韓国や中国・台湾の学会などとの共催もあってよいかと思います。準備にかなりのエネルギーが要りますが、そうした試みも考えられるかと思っています。</p>
<p>分子生物学会とは2年に一回は合同がよい。将来的には統合すべき。</p> <p>私は80、90年代は生化学会によく参加していたのですが、最近は分子生物学会が中心となっています。両学会の大会の内容を見ると大きな差異はなく、毎年、4日間の合同大会にしたほうがよいと思います。</p> <p>生化学会のみで開催する意義が近年低下しており、□</p> <p>企業ブースの数等、情報交換の場としても質の低下が著しい。</p> <p>ASBMB/FASEBを参考にしたらよいとおもいます。□</p> <p>分子生物学会だけでなく他の学会との合同開催ができるといいですが場所が我が国ではかぎられます。</p> <p>・なぜ他学会と合同で学会を開催するのか、結果としてどうだったか、などがこれまで十分にアナウンスされてこなかった気がするため判断しきれない。</p> <p>分子生物学会が生化学会化している現状で両方の学会に所属し、両方の大会に出席するのは非常な出費であり、非常な徒労です。統一、合体の方向で努力されんことを切に希望します。現状で、どちらに参加した方が有意義か？の選択になって行くと、学生諸君の大多数の意見（分生大会の方が面白い）からすると、ますます退化の傾向が顕著になってしまおうと考えます。合同大会の後の単独開催の寂しさ、落差はあまりにも大きいと思います。発表形式や言語などは、その後での検討で十分かと思っています。</p> <p>まず分子生物学会と合同の学会を設立し、その後他学会との合同学会開催を模索する。</p>



開催に関しても、学会の威厳を保つならば毎回単独開催とすべき。
今日、生化学会大会において分子生物学的手法を用いた演題が多く、2学会を区別して開催する必要が感じられない。また、合同開催のときは活気があって良い。私は、生化学会大会と分子生物学会年会はお祭りのような要素が強いと思うので、大勢で盛り上がったほうが良いと思う。生化学会自体は存続しても良いのではないかな。
分子生物学会と分野がほぼ一致するので、学会は毎回合同開催がよい。将来的には□学会自体も分子生物学会と生化学会で統合すべき。発表言語については、学生の負担が大きいため日本語・英語のどちらでも可とした方がよい。
必ず分子生物学会と合同で、しかも時期的には12月にお願いします。生化学会が大きすぎて内容や演者が分散しすぎていることは以前より感じておりましたので、分野ごとに分けて開催するアイデアには賛成します。また科研の申請や後期の講義等がはじまる10月の学会は参加出来ないことがありとても残念に思っていました。その点もできればご留意頂ければと思います～合同開催では12月が多かったように思います。
合同開催として、生化学会開催時期(9～10月)、分子生物学会の開催時期(12月)の間、科研申請も終わった11月中旬～下旬頃が良いのではないのでしょうか？
問9に関して、学会は「細やかでも学術的価値」の質的保証をすべき機関であり、その大会は単なる発表会的なものとは一線を画すべきである。最近、規制緩和によるためか学会と称するものがとても多く散見され、法人格も危ういものまである。今後の在り方として、生化学会は先頭に立って、生化学が包含している学術に関する団体等を整理・統合する見識を持つべきである。第一段階として分子生物学会などは大会の合同開催、やがては吸収し、生化学会の一発表分野とすべきである。
問9に関して 化学会、薬学会、農芸化学会、蛋白質科学会、糖質学会などとの合同開催も考えてみてはと思う
分野を限定した会とすると、他の限定された会との重複が起こる。また、他の領域の勉強ができなくなる。分子生物学会と合同で行った場合、このセッションはどちらの会が企画しているか、バッティングしない範囲でわかるようにしたらどうか。両方が同じ程度の関わりセッションの場合はあえて、どちらも表明しなくてよい。分子生物学会以外と行うとなると、コンスタントに続くか疑問。単発で行うよりも、コンスタントに行う方向の方がよいのでは。
複数の学会と合同開催するのは、緊密な連携が必要と感じます。その都度開催の事情(例えば会場など)も加味されますので、緊密な連絡をとり合いながら「数年に一度ずつ」も一案かも知れません。
わたくしは若い頃、生化学会で育てられました。その後生化学会を一度捨てました(会員は続けましたが)。そして最近になって再度、生化学会のそばに立っています。したがって、あっちに行ったり、こっちに行ったりした会員の感想としてお聞き下さい。ただ、自身の学術研究を伸ばしてゆくためには、もっとも興味ある学会に出席して戦ってみたいと考えてのことでした。□
□
この30年ほど、分子生物学が隆盛を極めてきましたが、もう既に会員数と年会出席者数は減少し続けています。もちろん、その分生化学会で増加している訳ではありません。つまり、会員数が増加するとか減少するとか、そういったことは時代背景をもとに語らねばならず、ある時期は隆盛を極めつつも、ある時期は耐え忍ぶのではないかと思います。そして消え行く学会もあるはず。しかしながら、現在の学問動向を考えるに、生化学会が伸びてゆく余地は十分にあります。というか、生化学会がここで大きく挽回する時期なのに、と思えてなりません。色々な学会で、代謝が大切だ、代謝が重要だと言ってます。代謝はもともと生化学会の十八番のはずなのにとの思いです。打つ手はあると思いますが。□
□
これまで分子生物学会と生化学会が年会を合同開催するとか、学会自体を融合するとか、そのような議論がなされたことがあります。しかし、その度に分子生物学会は冷たい対応をしてきました。わたくし自身はなぜそのような対応をとるのだろうと理解できずしていましたが、ここに分子生物学会の限界が見えます。ただし、一部の分子生物学会会員は両者が並び立つような未来を見据えつつ、合同で行うべきではないという美しい姿を描いておられ、それには賛同します。そして、同じような限界が、一連の研究不正問題に付いての対応にも現れていると思っています。分子生物学会が勝ち組の論理を振りかざした対応であったのに対し、生化学会の対応は真摯かつ本質的なものでした。ここに、両学会の文化の違いを感じます。わたくしは両学会に所属する1会員として、これらの二つの学会が一緒になればどれほどよいだろうと思ってきましたが、この数年の経験から、一緒にならない方がよいのではないかなと思うようになりました。歳を取ったから、思想が保守的になっただけなのかもしれませんので、最終的には若い人達の決断にしたがえば良いと考えますが、以上の感想をお伝えしておきたいと思いました。
年会の合同開催だけでなく、分子生物学会との合併も視野に入れるべき
生化学はもはやライフサイエンスの基本的研究領域になっており、生化学の技術を用いて研究者それぞれの興味分野に進出することが多いと思われる。そのため、他分野との合同開催が意義を持つと思われる。
分子生物学会と別に開催するよりも学会自体が一緒になったらいかがでしょうか？
生化学会の大会は1年に一回定期的に行われる重要な発表の場であると思います。近年はいろいろな会合等が多すぎるため、生化学会と分子生物学会なら分子生物学会という方も多いようです(それが何故かは生化学会を主流に考えている私は理解できませんが)、同時開催がいいという意見もあると思います。しかし、本当にそうなのでしょうか。生化学会の立ち位置は分子生物のそれとは異なるのではないのでしょうか。そもそも、学会をもり立てていくために選ばれている多数の理事やその他の執行部の方は本当に生化学会の行く末を考えているのかとても疑問です。(例えば理事会を欠席する。生化学会の大会に参加しないなど。)もう一度初心に立ち返って生化学会を考え直す必要があると思いますが、それが毎回分生との合同開催ということになると、学会の存在意義自体が疑われるのではないかなと思います。
いい加減、学会を統一して欲しい
少なくとも生化学会と分子生物学会の年会は毎年合同で行うことを希望します。運営側には色々な問題があるとは思いますが、参加する側としてはもはや別々で開催する意味がないのではないかなと思います。□
他学会との合同開催や、あるいは複数の学会合同で大きな学会を数年に1度開催というのもいいのではないかなと思います。
分子生物学会と合同開催を希望します。経済的視点では、一緒になってほしいです。
昔と違って医学よりに偏ってしまったので、興味がなくなったが、単独開催しかない。
生化学会と分子生物学会は米国のように統合するべきだと思う。両学会で同じような発表が行われている程度はどれくらいか、両学会の会員となっている人の割合はどれくらいか、を調べて公表してほしいと思います。JBの質を高め、日本の代表的な雑誌にするためには、統合するのがいいと思います。外国から見た場合、日本のどの学会が連絡先になるのか、はっきりしていないのではないのでしょうか。□
プログラムでは、生化学会は物質名を中心に、分子生物学会では現象名や生体のプロセス名を中心に編成するという昔のしきたりが今も生きています。生化学会の編成はやや古くさくて若い人たちに合わないのではないのでしょうか。
生化学会は分子生物学会と毎年合同開催で良い。現状では、生化学会の方が全く盛り上がっていないし、殆どの会員にとっては別々にやるメリットが全く感じられない。
生化学会と分子生物学会とは第三者から見れば似ているかもしれませんが、生化学会に育てられた私にとっては今でも異なって見えます。時代の流れ上、数年に1度の合同開催は良いと思いますが、生化学会の根幹を構成する先生方に学会運営を頑張ってもらって、生化学会色を出し続けて欲しいと思います。現在は生化学から離れた分野にいますが、年会は情報のupdateに非常に役立っています。
類似学会を合同で開催し、効率化を求める。□
毎年違う学会と合同し、新機軸を求めるのもよい。
分子生物学会とは合併するか、毎年合同で年会を行う方がいいと思っています。
生物物理学会との合同開催も視野に入れてよいと考えます。
学会自体を分子生物学会と統合してほしい。年会費を私費で払っているため、両方の会費を毎年払い続けるには負担がある。類似領域の学会はひとつで十分である。このままでは生化学会をやめる決断になると思います。

合同学会のコラボ先については、生物系に限らず、化学や工学、生命倫理や臨床系など、幅広い学会を視野に入れてさらなる生化学の発展を図るのが良いと個人的には思います(なぜならば、生化学を軸としながらも生化学自身が幅広いバックグラウンド、コラボレーションの上で成り立っているため)□
分子生物学会と毎回合同とする。さらには、がん学会、神経科学会、細胞生物学会、生理学会、薬理学会などの他の学会との共同開催の枠(相互乗り入れ)を一部に設ける。一般演題とシンポジウムの時間帯をずらして、一般演題への参加者数を確保する。日本語のセッションと英語のセッションを設ける。韓国、中国、台湾、シンガポールとの共同開催シンポジウムを設ける。参加者数1万人以上となるように目標を設定する。
分子生物学会にされるべき
分子生物学会との合併を検討する
問9について:米国の「Experimental Biology」の形式が理想。複数の学会から成る組織を作り、年に一度、同じ場所同じ期間にそれぞれ開催する。基本は各学会の年会とし、割引の登録料で他学会の集会にも参加できるようにする。これが実現できるなら問1と問2は別の回答になる。
分子生物学会との合同大会が、内容が充実していて、良いと思います。
年会の開催だけでは無く、学会自体も分子生物学会と一緒にすることを模索していただきたい。
シンポジウム、ワークショップ、一般演題とも最新の研究分野をカバーできていないので、分子生物学会との合同開催を希望します。
合同開催の意味が分からない。生化学会会員が少なくなって大会がみずぼらしくなるというような理由なら合同開催の必要は無い。単独の方がかえっていい議論ができるように思う。それでなくても今の発表件数は多すぎるように思う。
分子生物と内容、参加者とも結構かぶっているの、年に2回行くのは負担、かといってどちらかのみ参加だと聞き逃すものもある。常に合同開催していただくとありがたいです。
合同開催について:ここ10年くらいのプログラムをみていると、分子生物学会も細胞生物学会も発表ジャンルはほぼ同じです。参加費や時間の関係で全部に参加するのは難しいし、特段の意義も正直感じません。合同開催ではなく、学会自体の再編・統合を早急に検討していただきたいと思います。
問9:合同開催の方がより視野が広がる上、討議が活発になると思う
分子生物学会との合同:できるだけ合同開催が望ましい。一部の右派は頑に所属学会でシンポジウムなどの開催を行っており評価できるが、ほとんどは両学会に所属しており、声がかかれば「同じような内容」を「同じようなメンバー」で両学会で発表しており、もはや分子生物学会の独立時の信念は失われている(三行半を突きつけられた生化学会も問題ですが)。会頭になりたいチャンス(少なくとも2倍にはなります)を残して両方の会を存続させるのなら、まさに会費の二重請求のようなことをせずに、半額にでもするべきかと思えます。米国のように、そろそろ和解も必要なのでは? アプリ:要旨検索のアプリ開発に会費をつぎ込まないでください。使いにくいだけです。結局プリントアウトしますし、昔のように紙媒体でお願いします。
分子生物学会との合併を強く希望します。□
日本の人口は減少し、会員を増やす努力をするなどは申しませんが、そろそろ日本国内の少子化という現実を真面目に考えられては如何でしょうか。また、日本の将来の財政状況を考えると、二つの似たような学会に、税金を使うのは如何なものでしょうか。会員年会費、交通費、宿泊費、全て現在は税金で賄われていることを認識すべきだと思います。
合同開催は、数年に一度がいいと思います。分子生物学会はとの合同大会は、費用の面などから便利なのですが、巨大すぎて会場が限定されています。コンパクトになりつつある生化学会単独開催ならば、会場の制限は緩和され、全国で開催できるようになるのではないのでしょうか。
合同学会とする場合、開催時期や場所など分子生物学会に振り回されないように、複数学会との開催を検討する。また、参加学会独自の企画があってもよい。
分子生物学会はメンバーが重なるので、毎年分子生物と合同でもよいように思います。加えて、その他学会との合同開催は視野を拓けるためにもあったほうがよいと思います。
そろそろ生化学会と分子生物学会のようなマンモス学会は1つになる時期でしょう。小さな学会は存続意義がありますが・・
関連する複数の学会と合同学会を開催することを希望します。学会が多くあり、毎年全ての学会に参加することは、時間と費用の点で難しいです。
毎年、分子生物学会との合同開催にする。出来ないのなら、生化学会大会を廃止してもよいのではないかと。
早く生化学会と分子生物学会を統合すべきである。
分子生物学会と合併すべきだと思います。
生化学会と分子生物学会を統合してはどうでしょうか。□
やはり合同開催と比べると参加者数や規模が小さく感じました。
問9:分子生物学会と2回に1回程度で合同開催し、それ以外の際は他の様々な学会との合同学会にする。
年に一度くらいは、FASEB meetingのような分野を限定した学会を開催すると、深堀のサイエンスが楽しめると思います。
アメリカのExperimental Biologyのように、複数の学会との合同で行い、より多くの情報を一回の大会参加で行えるようにしていただきたい。
もし、年会(大会)を毎回合同開催踏するのであれば、日本分子生物学会と学会を統合するのが良いと思います。
分子生物学会との合同開催の年もあれば別々に開催される場合もありますが、統一するのは不可能なのではないでしょうか?そもそも、今日、生化学、分子生物学双方の手技を要するのが当たり前となっており、区別して学会が存在している意義がよくわかりません。トピックスも双方の学会で重複するものが多数あります。
問9に関して、合同開催には賛成ですが、その場合はどちらの学会期間にも参加可にしてほしい。その際、(問2の期間に関して)合同学会開催期間は1週間ほどが至適かと考えます。
分子生物学会・細胞生物学会と合同
分子生物学会は今や大きくなりすぎており、生化学会との共催をしづることも多い現状です。それ以外の学会との共催ももっと増やすのがよいと思います。
生化学会に出ているテーマも分子生物学的でも、手法に差がなくなってしまうと思うので、一緒になったら良いと思う。別の学会と一緒に合同開催してもテーマを狭くする方向にならないなら、よいと思う。
問9、分子生物学会とはいつも合同開催を目指す。できない場合でも併催(同時期に近い場所で開催)する。さらに他の学会と併催しても良い。学会の活動として研究と直接関係ない活動はすべて中止する(囲碁やゴルフ?など)。
医学部生化学講座を除き、生化学会である事、あるいは学問としての生化学という分野に需要がないことは明らかです。近年の生化学会は情性、以前生化学会が偉かった現・老人への義理、あるいは現・執行部の権益維持のために大会(=学会の最大の事業)を継続しているようにしか見えません。少なくとも日本のライフサイエンスの将来を担う若い研究者には、若手企画や若手向け企画など、一方的で表面的にしか目が向けられていないと思います。どのようにしたらいいのかわからない問題ですが、有効な対策がこれまでも今後ともとれないとしたら、それは生化学会がなくてよいということです。生化学会の近年の懇親会に参加された先生方なら、懇親会が一部の偉い先生方や老人のための会であることや、学会の将来を担う若手は参加しない、つまり現在や今後の生化学会に期待する、貢献したい若者がいないことはお分かりいただけるはず。カバーする内容が分子生物学会と重複することも周知の事実です。分子生物学会ですら参加者が減少して開催期間が短くなり、その存在意義に疑問がよせられている状態なのに、なぜ、生化学会が分子生物学会に加えて今後も必要なのかをきちんと説明できる方はいらっしゃいますか?分子生物学会と合併しないなら、発展的解散しか道はないと思います。理事会では数年おきの合同大会が議論・実行されていますが、すでにそういうレベルで連携をアピールする状態ではないのです。どちらがどちらを吸収するか、名称をどうするかは老人や既得権益者以外にはどうでもいい議論で、若手やサイエンスの将来に目が向けられていないことを象徴しています。若手から支持される「存在意義」を説明できないのに、解散が議論されないのはなぜでしょうか。
今年の大会は楽しめました。ポスター発表の時間にフォーラムを開催するのはやめて欲しいです。

<p>このような受け皿の広い学会も必要だとは思いますが、あまりにも節操がないようにも感じる。若手が少なく、萎縮している感じがする。分子生物学会と生化学会が存在する学術的意義が希薄になっている。それでも合同はできないとの政治的な理由もあると噂を聞く。学会に企画力がなく、後手後手である。プレナリーは30分程度で人数を増やしてもらえると興味ははずれたときの残念さが減るだろう。会場の大きさと聴衆の人数がマッチしていないことが多い。毎年データを取ってテーマと人数の調整をすすめてくれると立ち見でつかれることがない。</p>
<p>一般演題の発表時間はもう少し長くてもよいと思いました。あとは、託児所を利用したのですが、特に学童用に、弁当を外注してもらえるオプションがあるとありがたかったです(分子生物は、あり)。</p>
<p>多くの学会をできるだけ統合し、数を縮小していく必要があると感じています。生化学会自身をすこしスリムにして、他学会との統合に備えることも考える必要があると感じています。</p>
<p>シンポジウムは、同じ人が同じ内容を毎年話している例がある。また、他学会と同じだったりすることもありシンポジウムの意味がない。日本の学会なのだから、日本で議論がよい。国際学会になったら英語にすべき。</p>
<p>分子生物学会と比較すると、参加者、ブースともに少なく寂しかった。規模を縮小するならそれで、濃密なセッションをたてるべきかと思う。口頭発表も、良いが、あまりにも短く、意味があるが分からないし、今年のプログラム構成は、ワークショップ等とかぶり、よくなかった。□</p>
<p>座長も、若手で構成するなど、魅力ある構成にしないと、伝統だけでは、生き残れないと思う</p>
<p>一般発表は全てポスターとし、組織委員会が口頭発表を発表者に依頼してワークショップを組めば良いと思います。言語については日本の学会なので基本的に日本語で良いと思われま。学術雑誌等で特集を組むような形式で他学会とのジョイントを行うのは良いことではないでしょうか。例えば、「代謝」というテーマを設ければ関連する学会として「代謝学会」、「ミトコンドリア学会」等とのジョイントが可能と思われま。</p>
<p>もっと最新の研究成果の発表の場であり、更に議論できる状況での学会開催による、情報提供&amp;交換の場であればと思われま。</p>
<p>発表時の言語：口頭発表はすべて英語、ポスター発表も英語だが、日本人に対しては日本語も可とする□</p>
<p>大会の成否を決めるのは、応募された演題をどのように分類して各セッションにまとめるかと、座長の質の向上だと思います。プログラム委員と座長がしっかりしていれば、生化学会に演題を出したくなります。□</p>
<p>ぜひよろしくお願ひします。</p>
<p>分子生物学会と合併する。</p>
<p>海外からの招待者がいないセッションは日本語がよい。英語にすることで議論が活発にならないし、特に若い人は質問しにくくなる。□</p>
<p>他の学会と合同にして人を集めても意味がない。こじんまりとしている方が色々な分野の話題を聞いて勉強になる。無理に日数を増やしたり、シンポジウムの数を増やすよりは、会場数をしばって内容を濃くしてほしい。ポスターも一日に300以上あると見て回るのすら嫌になる。分子生物との合同開催の時は、学会というよりお祭りのような感じで、有意義という感じはしなかった。人の多さではなく、議論の活発さを追求する方が学会として価値があると思う。</p>
<p>偉い先生の講演を聞く会、同業者と親密になるための会、それぞれ特化した会を催すというのも一つのアイデアかと思ひます。分子生物学会とは一線を画したゆに一くなものを期待しております。</p>
<p>言語に関して、英語が標準言語だとしても、日本の学会なのだから英語のみではなく、英語併記にするのが適当と思ひます。□</p>
<p>多様化して一分野のみで研究を進めるよりも、多角的な視点で研究に取り組むことが必要となると考えているので、会期を延ばしてでも、様々な学会が集まる大掛かりな学会と、分野に特化した小規模な学会があるといいかと思ひます。</p>
<p>問1 □</p>
<p>他の学会と差別化する上で、大会ではなく分野別の集会というのも一つかとも思ひますが、一方で若手の研究者が分野外の研究を知る機会も大事な面かと思うので慎重に考えるべき。例えば、専門分科会は毎年にし、大会を2年に一度にするとか。□</p>
<p>□</p>
<p>問9 □</p>
<p>問1のありかたにも関係してくることかと思ひます。□</p>
<p>合同開催にするのでも良いですが、それぞれの学会としてのあり方が問われることになりま。</p>
<p>今回の大会はプログラムの組み方に問題を感じま。特に、初日は午後からの開催で、どこの会場も人が少なく、ポスター会場や展示場も設営している最中で、盛り上がり欠けま。初日も朝からフルに行なうのがよかっと思ひます。□</p>
<p>また数少ない生命情報系のセッションが同じ枠で背中合わせに行なわれていて、お互いが参加できないことががっかりでま。□</p>
<p>□</p>
<p>生化学会は医学系の参加者が多く古典的な研究が多いというイメージでまが、分子生物学会と合同で行なってから、わりとオープンで新しい研究も多くなっているように感じてま。しかし、今回の大会は、昔の生化学会に逆戻りで、むしろ合同大会を経験してから生化学会単独で行なうと、面白みの無さが際立ってま。□</p>
<p>分子生物学会も去年は斬新な試みが沢山行なわれ、学生や若い研究者には語りつがれるほど面白かっと思ひますが、今年は普通の会になってま。□</p>
<p>□</p>
<p>これからの形式ですが、分野の重なりが多い分生、生化合同で、とにかく広い分野を対象に、また、ある参加者がテーマごとに集中して参加できるように、プログラムにもメリハリをつけてもらいたいと思ひます。□</p>
<p>□</p>
<p>発表形式は、日本癌学会のように、英語のセッションと日本語のセッションの2種類を用意するのがよいと思ひます。癌学会は、実際この方式によって、アジアや諸外国からの参加者が最近増えていて、質疑応答も盛んになっているように思ひます。□</p>
<p>□</p>
<p>プログラムはすべて英語で構ひません。日本語で書く意味は少なくなっています。</p>
<p>分子生物学会と分けて開催される意味がほとんどないと思ひます。いろいろと事情があるのかもしれませんが、毎年、合同開催にしていたら参加数も増えるのではないでま。□</p>
<p>また、一般講演を減らす、英語でのみ討論というのは反対でま。理由の一つとしては生化学会は学生や新しい分野に挑戦している若手などその分野での発表に慣れていない人たちも気軽に発表できる貴重な場だからでま。敷居の低い講演もあっていいと思ひます。□</p>
<p>英語力強化の推進には大いに賛成でまが、グローバル化=母国語を軽んじること、にならないようにすべきでま。最近、アジア、アフリカからの留学生と触れていて感じることは彼らは専門教育に使用する言語と一般市民が生活に使う言語が異なっていることが多いこととでま。自国の言葉で専門分野を語ることは国内での教育レベルの高さの現れであると同時に過去の日本人研究者達の努力の賜でもあります。また、一般市民と専門家との乖離を防ぐためにも自分の専門分野について母国語で語る能力は不可欠でま。日本語で専門の発表ができない人間を育てるようなことにはならないようにしていただきたいと思ひます。</p>
<p>人口が減少してまから、当学会のオリジナリティを高めることができなければ、他学会との合同開催という在り方が学術的にも社会経済的にも現実的になるのではないでま。発表言語については、学部学生・修士学生は日本語でも英語でも可、博士課程学生以上は英語、若手支援を英語発表者対象に、という方法はどうでま。プログラムは日英併記が日本人学生に直感的にわかりやすく且つ国際的にも通用しま。若手のモチベーションを高揚させる口頭発表の増加策をとるとよいでま。</p>
<p>世界的にはIUBがIUBMBになったように、国内の学会も整理した方がよい。毎回合同開催することで合併への垣根が低くなるなら良いことだ。</p>
<p>学会員が参加している意識・意義を感じるには、一般公演での口頭発表を行うことが一番だと思ひます。</p>
<p>地方部会の位置づけを考え直し、代わりに分野毎の小さなシンポジウムを毎年10-20程度(keystone symposiaのようなもの)を開催してはどうか？</p>

- プログラムの言語ですが、国内開催では、全くの英文化で失うこともあると感じます。そこで、タイトルは日本語併記、50字程度のショート要旨を日本語で併記し、あとは英文表記、というのが良いと考えます。□
- アジアのコアな学会とすべく、分子生物学会と合同開催、ないし両学会の合併を望みます。両学会の明らかな性格、構成上の差異は見えてきません。米国の主要学会の規模を考えると、「ポスト」は少なくなるのかもしれませんが、日本の学会の存在が少なくとも東アジアで強化されていくためには、今後はムダにパワーを分散させるべきではないと考えています。□
- 言語ですが、演題毎に全くバラバラではなく、各セッション（一般、シンポ）は、英語、日本語のどちらかへ統一して構成するのが最も良い、と考えます。しかし海外からの参加者が確保できることが改革の最も基本となる条件です。□
- 今の懇親会は、学会関係者の表出には役に立っていると思いますが、機能としては低レベルだと思っています。広いポスター会場でアルコールを含めたどリングの提供があると実質的交流が楽しくなるのでは。□
- ポスターは、日本でもいよいよ生化学会が率先して、横長に大型化すべきです。会場はより広いところが求められますが、是非、トライすべきです。
- 懇親会の規模が大きすぎて、ただ食事を挟んで歩き回るだけのスタイルに魅力がない。複数の分野で設定し、Table Discussionなどにしては？□
- 一般演題はポスター中心でいいと思う。一般演題セッションの一つ一つが小粒で、個々の参加者のモチベーションが感じられない。
- 流行を追った演題、過大広告的演題は毎年繰り返さない。□
- 日本人は、日本語で書き日本語で話す。□
- 生化学的色彩が強く、他学会で拝聴できないものを採用する。
- 一般講演とシンポジウムの比率\* □
- シンポジウムの要旨が詳しいと参加を決めやすいです。
- 生化学が、さらに重要になっている時代なので、どのような形式でも継続させることが重要と考えます。
- 日本の学会なので日本語で十分。分子生物学会と一緒にしてほしい。同じ分野の学会は複数いらぬ。
- まずは中西会長の活動ぶりには敬意を表します。□
- 内容がほとんど同じ分子生物学会と生化学会を統一する
- 日本生化学会はマンモス学会で、分野も非常に広い。この学会で発表していることのごく一部しか参画できないという現実がある。個人的には、今のスタイルでいいのでは。
- 
- 大きいことはいいことだ、数は力なり、とばかりに横浜と神戸などの大都市のみで巨大な大会を開催することは改めるべき。□
- 
- 巨大大会の長所は「機器展とランチョンセミナーの充実（企業の大会への関与）」程度しかない。しかも、「機器展やランチョンセミナー」はあくまで大会の目的や趣旨からすれば付加的なものであるため、特に優先すべき企画ではない。□
- 
- では、何を優先するべきかということ、学術的な情報の発信、受信、共有、討論である。巨大大会では、多数の企画（講演、発表）が同時進行する。会場は物理的にかなり離れている場合があり、移動が大変あるいは面倒と思うことが多い。これは巨大デパートのイメージである。
- 
- これはやり過ぎ、規模が大き過ぎるとしかいいようがない。□
- 
- 大会開催の目的を考えれば、巨大デパート化は避けるべきである。絶滅した恐竜を彷彿させる。大きい専門店（家電量販店、大きな酒屋、大きな洋品専門店など）のようなものが一番よいと思う。□
- 
- こうなると、大会のあり方だけではなく、そもそも生化学会とはどうあるべきか、という根本的な問題にまで踏み込まなければならぬかもしれない。□
- 
- いずれにしても、巨大化しすぎて、大会を開催できる都市がごく少数に限定されてしまう、という状況は健全な感じがしないし、活発でなく全体的に停滞気味な印象すら受けてしまう。□
- 
- 最低限、政令指定都市のどこでも開催できる規模が大会の適正規模だと思う。すべての県庁所在地で開催できればなおよい。□
- 
- 「大会や学会が小さくなることはよくない、大きくあるべき」という強迫観念を払拭しなければいけない。□
- 
- 日本生化学会は日本の学会であり、日本の公用語は日本語だから、発表言語は日本語を基本とするのが自然である。平成21年に西田先生が大会長をやったときは、日本語による発表なので若い人は発表・参加して下さい、と呼びかけていたと思う。他学会との差別化、という目的があったのかもしれないが、「学術的な内容の充実」を重視するならば、あえて英語で発表や討論をする必要はないだろう。
- ポスター選出の口頭ワークショップは、支部会よりも規模の小さい研究会を同時開催しているような印象を受ける。結局、ポスター発表会場で話を聞く方がより細かいところまで聞けるため、今までも意義を感じたことは無かった。それよりは、もっと様々なテーマでシンポジウムをオーガナイズしてもらいたい。□
- また、学生の参加を無料にすることで、若手の学会参加を誘致しているが、シンポジウム発表やポスター表記が英語のため、とりつくしまなくウロウロする学生が多い。国内有数の学会であるので、グローバル化の推進は理解できるが、若手参加に目線を下ろすのか、国際化を目指し牽引していくのか、二兎を追うものは...にならないことを願いたい。
- 大会期間について。合同学会で3~4日間ぐらいの期間開催していると、自分のフィールドの発表日を中心に、他分野を聞く機会もあると思います。2日間だと、大学で担当している講義日程や委員会の都合によっては、参加ができない可能性があります。□
- 発表時の言語について。学会参加者の裾野を広げる意味では、日本語と英語を両方使える方が良いと思います。英語のみにするのは、やはり、日本人の若い人の参加を妨げると思います。□
- 合同開催について。生化学会から巣立って行った学会が多数あるように思います。分子生物学会を中心に、他学会との合同開催がふさわしいように思います。
- 開催地を固定せずに地方都市での開催も行うようにした方がよいと思う。
- 30年欠かさず生化学会大会に演題を携えて参加しているが、質の低下を感じる。広範な研究情報の交換や若手・院生の育成に軸足を定めていただきたい。
- 今年は理研FANTOM5の関係上、分子生物学会にも参加しましたが、他学会の良い面は積極的に取り入れるべきと思いました。

問1:毎年、学会のプログラムから聞くべき演題を選ぶのにかなり時間を要し、興味のあるシンポジウムが重なっているときもあります。分野を限ってより小規模の学会を年に数回開き、総会は2年に一度にするなども、一度試してみて、結果をまた討論してみるのもよいと思う。□

□

問4:シンポジウムは大変勉強ができて、聞く方には有難いですが、報告したい人には口頭発表の機会が欲しいと思う。私は最近では疲れることもあり、ほとんどシンポジウムしか聞いていません。□

問5との関連で、口頭発表の場では十分に討論できなかった時にポスターの場を利用して討論できればよいが、説明する人が不在だったり、ヒトが多すぎて近づくけなかったりする。両方を準備するのも大変と思います。□

問1とも関連して、学会がより小規模になれば、幾分やりやすいかもしれない。□

□

問6と問7について:ポスターや、要旨には英語を使用すれば、国内外の研究者にわかりやすいし、いずれ論文にするときにも便利だと思う。しかし、現状では英語による討論が十分にできる人は限られていると思うので、討論は自由にしたら良いと思う。プログラム集には日本語と英語の両方で、タイトル、氏名、所属を記載することが必要だと思います。□

□

問8:最近ずっと懇親会には出ていません。正直のところ、自分があまりアクティブに仕事をしていないという引け目と、知人や仲間が減ってしまったこと、無給で仕事をしているので節約したいという気持ちです。最近は何でも若手が優遇されるようになってきているように思います。特に若手の企画などしなくても、学会で以前の仲間などにあつて旧交を深めたり、発表を聞いた人にもっと親しく話を聞く機会を持ったりすること、あるいは大御所の仕事に関する思いで話などを聞かせてもらったりする場であっても良いのではないかと思います。□

□

問9:問1との関連で、もし年に数回、より小規模の分野別の集会をひらく場合なら、分子生物とも合流してそのような学会にするのが良いようにも思います。

大勢が参加しやすくするため、会費に上乘せしてでも、大会参加費を安くしてほしい。また、参加、演題登録が煩雑なので、必要な記載事項は、できる限りシンプルにしてほしい。

最近、生化学会の参加者が減少してきていると感じました。今回は、さらに多くの会場に空席が目立つようになったと思います。これは、大会が巨大になりすぎて失ってきた利点を見直すよい機会と考えます。並行して行うセッションの数をできるだけ減らしより広い範囲の話しを聞けるようにすることが望ましいと思います。そのためにはシンポジウムの数を減らし、ワークショップは廃止して、その枠で一般講演を増やし、若手にも講演をする機会を増やすことが、各人の視野を広げ、また初心者にとっては発表の訓練にもつながると思います。□

国際的に開かれた学会になることが望ましいことは確かです。しかし、日本の学会での発表が国際的には研究成果のcreditになっていないのが現状だと思います。そこで、英文プログラムを広めることは結構です。しかし残念ながら英文講演要旨を残すことは、成果を他所にもっていかれてしまうだけで、望ましいこととは言えないと思います。□

分子生物学会と重複して加入している研究者が多く、共催が望ましいと考える方が少なくはありません。しかし、共催では大会が更に巨大化し、その弊害が顕在化していると思います。さらに、現象論に注意が集まる分子生物学会と、分子反応(化学)を基礎に生命を理解しようという生化学会は目指す方向が異なると思います。そこで、たとえ小規模になったとしても独自に大会を開催することが重要と考えます。分子生物学会と連続して開催すると出張日数が長くなりすぎ、どちらかを選択しなければならなくなってしまいますので望ましくありません。

Semester制で授業を15回行う人には、夏休みや春休み以外での平日に学会出張するのは困難だと思います。可能ならば9月か3月に、それ以外の月なら土日を含む開催日とすることをお願いしたいです。

そもそも学会の数が多くて何回も参加できないので、どれもが人集めに苦労する。生化学会の大会は、会員が設立や運営に関わっている多数の学会と協調し、それらとの合同開催などを積極的に進めるとよいと思う。

生化学会は年に一度の大会で、とても楽しみにしているところです。分野を分散してしまつては、蛋白質科学会やほかの研究会との独自色をいかになくなるのではないかと心配です。□

また、そのためにも会期は長いほうが良いのではないかと、思います。□

また、英語を主体とする学会が他に多いですが、グローバル化とはいえ、英語にすると敷居が高く、また、ディスカッションも浅くなってしまうのではないかと、思います。なのであえて日本語で、参加しやすく、気軽にディスカッションできる場であったほうが良いと考えます。□

□

また、口頭発表を若手ができるようにすることで、キャリアアップにつながると思いますので、口頭発表もできる機会があったほうがよいと思います。また、口頭発表の後、ポスターで細かい議論をする、というスタイルは準備が大変ですが、有意義であると思います。□

□

懇親会ですが、若手企画を同時開催はとてもよいとおもいます。化学とマイクロナノシステム学会はその形をとっておりまして、若手同士が交流し、ラボを超えたコミュニティを作っているように思えます。また、その交流から、自分ももっと研究をやろう、来年度も学会へ参加しようというモチベーションにもつながっているように思えます。□

ただ、若手と先生方が交流がないのは寂しいですので、会場は仕切りを設けて隣り合わせで行い、途中から仕切りを取っ払う形が理想的と考えます。□

いかがでしょうか

現状を把握していませんが、シンポジウム等の企画者およびその関係者(例えば、企画者と1年以上同じ研究室で研究を行っていた師弟関係などにあつた者や、企画者との共同研究内容を含む発表を行う者)が発表を行う場合、懇親会の参加費を負担してもらふべきだと考えます。また、学生とその他、という形で参加費を分けるのではなく、ポスドクや助教などの若手研究者の負担額を別に設けて若手研究者の負担を少なくすべきだと考えます。

私の個人的な意見ですが、学会自体が自身の存続を目的にしてしまつている部分がある。研究人口が減っているのだから規模を縮小し、効率化することが必要と考える。大会は、3~4年に一度で良いと思う。あるいは物理的に学会を開催すること自体縮小を考えても良いと思う。(オンラインコミュニティのような形でもよい。)生化学会の特徴は何なのか?乱立する他の学会と何が違うのか?何を目的にしているのか?理想的にはゼロから考え直してよりよい学会を目指した方が良いと思う。発表形式に関して日本のコミュニティなかでの議論を目的にしているのであれば、英語を使う意味はないのでは。殆どの参加者が日本語を話せる中で、何でも英語にすれば良いのではない。教育のために英語を使っているという説明も成り立たない。教育が目的であるのであれば、学会の名前を変えた方が良い。「国際的に通用する」という一つの価値観が大切だという学会であるならば、一流論文を発表した人だけが参加すればよい。「国際的に通用する」というのは結果であつて目的ではないのでは?

社会的な問題について公的な議論を起こすべき。分子生物学会はいまやスポンサーの影響から逃れられなくなっている。良識を示せるのは生化学会であろう。

私は生化学会、分子生物学会のような体質になるべきではないと思います。分子生物学会に関わる方は極めて多くの不祥事を起こしており、かたや生化学会はそれほどではありません。その違いは生化学会ではこれまでは、シニアの先生方が睨みをきかせていたことも一因だと思っています。ですから、シニアの教授は一般演題やポスターで若手研究員を叱咤激励しなくてはいけないと思います。□

今年の懇親会にも出席しました。生化学会を根っから好きな方は出席していて、楽しかったです。しかし、シンポジウムで発表した方をお誘いしても、会費が高いので来てもらえませんでした。四条あたりで飲んでいたようです。懇親会は1日目ではなくて二日目だと集まりが良いと思います。懇親会は就職活動の場と位置づけて、多くの教授もそのように考えて出席して下さると、会費が高くてでもポスターは出席すると思います。□

シンポジウムも悪くないのですが、一般講演も座って聴いていると、なかなか楽しいです。ときどき、質問をしてあげると、これまた楽しいです。しかし、どれだけの教授が一般演題に出席しているかと考えますと、とっても少ないように思います。やはり、教授が積極的に一般演題会場に座って、鋭い質問をして、発表者と真摯に向かい合う事が必要だと思います。教授は忙しいのは分かりますが、年に一度の学会なので、途中で会場を抜けるような事はないようにしてほしいと思います。□

使用言語は、抄録も発表も日本語が分かりやすいので嬉しいです。海外の方がいらっしゃるシンポは英語でよいでしょう。

行政や市民の参加を促して欲しいです。分生を意識するわけでもないですが、社会の理解があつての生化学だと思っています。これからは科学振興のために第一線の先生方に若手が研究しやすい環境整備をさらに勤めて学会としての社会貢献活動を進めて欲しいです(市民への教育などは、サイエンスコミュニケーションに力をそそいで生化学会が後援している生化学若手の会などにも協力要請すべきだと思います。)

今回参加してみて、学生だった頃に比べて寂れてきた印象を受けました。もはや単独では研究者の興味を維持しにくいものと思います。秋冬に開催している学会と幅広く合同で開催してもよいと思います。日本は特に学会が細分化されていて、会費の納入が困難になるので、将来の合併も検討すべきでしょう。巨大な包括学会と専門の分科会に再編するのがよいです。大会も、前半に包括シンポジウムをして、後半に分科会の開催がよいです。

今回の学会運営で問題点がかあると感じたので、箇条書きで書かせて頂きます。□

(1)ポスター発表の時間の裏にフォーラムなるものがある場合がありますが、このような時間の割り振りは大変問題があると思います。実際、ポスター会場へ足を運ぶ人が少ないと感じました。□

□

(2)口頭発表に選ばれても、ポスター発表の後に(ひどい場合は次の日)に発表がある場合があります。フォーラムなどに時間を割かなければ、この問題は避けることができると考えられます。改善を求めます。□

□

(3)ポスター会場が離れた場所で2カ所ありました。ポスター時間帯に片方の会場にいと、もう一方の会場へ足を運ぶことは事実上不可能でした。ポスターの間隔・設置の工夫で1カ所で行うことが十分できたのではないかと思います。実際、会場にはずいぶん無駄な空きスペースがあったと思います。

最近では参加していませんが、何れにしろ学会の原点(研究者の切磋琢磨に繋がる研究交流の機会の提供)が最も重要であると考えています。要旨作成は、学生に文章を書かせる一つの重要な機会になっており、邦文を可とすべきだと思います。□

国内外で国際学会に参加できますので、生化学会まで英語を義務化する必要はないと思います。□

特別講演やシンポジウムは内輪うけになっていて、本当に興味あるものが出てきません。□

年1回開催の方が、運営される方にとって楽なのではないかと思います。

生化学会の特徴(タンパク質や生理学的な手法など)を出すようにしないと、間口が広い分「生化学会で発表しよう」という意欲が出ないと思います。□

規模を追う必要よりも、参加しての満足度を上げてほしい。□

学生向けといのであれば、領域外への啓蒙を目指してあえて日本語での発表を維持するのもいいかと思っています。

毎回合同年会とするならば、年会費がどちらかの会にしか払われないような気がします。合同年会には反対しないが、分子生物学会と兼ねて入会している方も多いと聞くので、両方兼ねている方は年会費の割引があれば両方の会でメンバーが増えるのではないかと考えます。

参加者数が減っていることをマイナスととらえるのではなく、むしろ、札幌、博多、金沢!など過去に開催していた地方での開催も再度可能になってきたとプラスに受け止めるとともに、その地域での他学会員の参加費を軽減して新規会員開拓の機会ともすべきでしょう。

プログラムはこれまで通り冊子体で事前に送って下さい。

・京都大会では、フォーラムとポスターセッションが重なり、聞きたい演題を聞くことができなかつたのが非常に残念でした。

・京都大会のように詰め込んだ日程にするのであれば、参加費をもう少し高くしても、会期を長くすることが良いと思っています。この際、日にちを限定して参加しやすいように、大まかな分野別に日程を分けて頂けると助かります。

・企業展示料金を安くしてでも、もっと多くの企業ブースを出して欲しい。生化学会は、大規模な企業ブースを出展できるポテンシャルはあるはずですので、企業フェア(?)などと共催するなど、こちらの規模も拡大することも重要かと考えております。

・ここ数年で企業ブースが減っているように思います。また、分子生物学会と生化学会の企業ブース数の差は明白です。このような点からも、生化学会の勢いが弱くなっている気配を強く感じます。年会は、分生に限らず様々な学会と合同開催することで、さまざまな分野の研究者が集える大きな集会にすることを期待致します。(なお、この考えは、支部例会などの小規模集會を残すことを前提としております。)

最後に、現在参加費はクレジットカードでの支払いが可能ですが、年会の支払いが振込です。振込を忘れてしまうことが多く、クレジットカードでの自動引き落としシステムが非常に便利だと思います。自動引き落としができなくても、クレジットカードでのオンライン決済ができるようになると、研究室から直ぐに送金できるので、非常に便利になると思います。ご検討をお願いいたします。

私は今年の年会は参加していませんが、一般演題の口頭発表が6分なのは短いと思います。より多くの人に口頭発表の経験を積ませる、という目的もあると思うので、人数と時間のバランスを取るのには難しいと思いますが...

生化学会は今からどういう言う方向に進みたいのか見えない。iPSや再生医療の流行に流されて、生化学の基本的な研究がされにくくなったからかもしれない。□

教育講演、教育実技(新しい技術、常に使用するような実験技術)などの教員になった研究者に対する教育もあつたらいいと思う。大学のレベルが下がり、地方私立大学の教員は、教育に時間を取られ、自分の勉強に時間も取れず、時代遅れの教育になってしまっている。学会で、今主流の研究の教育講演や実技などの講習を行っていただけるとありがたい。□

大学院生(修士)は義務付けられているところが多いせいか、一般公演はくだらないものが多すぎる。しかし、大学院生にとっては必要だと思う。

□大会長のポリシーに従って、フレキシブルな斬新な試みを行い、マンネリを防ぐのが良いと思います。□

不適切な未熟なポスターを出すと強い指導が入るような自浄効果を期待できないでしょうか。

一つの分野で複数のシンポジウム、口頭発表が開催されることは生化学会の一つの特徴であり、会期を維持してほしい。外国人率数%程度ではないかと思われるが、国際学会も別途あるので、英語での発表に拘る必要はないと考える。英語にするのであれば、国際的な規模での学会としなければ意味が無い。

ことは一般口演が最後でしたが、最後まである程度の数の人が残ってくれるプログラム編成にして欲しい。□

分生よりはシニアでしっかりとした発表も多いので、その特徴を活かされるように。

医学系学会、分子生物学会とより差別化して欲しい。生化学会なら、生化学に注力すべき。他の学会でできることを生化学会が真似る必要はない。

合同開催について合同にする目的はなんですか?□

多くの方が生化学会と分子生物学会の所属していると思うのですが。□

近年開催時期が毎年変わっており調整が大変であること

いろんな余計なことはせずに、むしろシンプルな方がいいと思います。

<p>Plenary Lectureには大金がかかると聞いています。そこに何十万円もかけるなら、別の使い道があると思います。□</p> <p>シンポジウムも、無理に外国人を招聘する必要はないと思います。□</p> <p>懇親会は、余興や装飾にお金をかけずに、もっと安くして欲しいと思います。学生が懇親会に出てもたいした意味はないと思うので、学生を低額や無料にするのではなく、教員やポスドクの料金を下げるべきです。□</p> <p>合同学会は分子生物学会とだけにしてください。あまりややこしい企画はしないでください。scientificな企画やdiscussionを大事にしてください。</p>
<p>若手優秀発表賞について、現状では、セッションの座長が選出することになっていますが、ほとんどすべてのセッションにおいて、2-3□</p> <p>人の受賞者の内、1-2人が、座長との共同発表者が受賞している現状はいかがなものかと思えます。</p>
<p>たとえシンポジウムであっても年会費と学会参加費を払っていない非学会員は講演すべきではない。その分、学会参加費を抑えられるはずで</p> <p>す。</p>
<p>インターネットの普及に伴い、学会（大会）に期待される役割は変化している。学会大会には学術交流面と、学生・院生の教育という面があり、院・アカデミア離れが加速している今、後者の重要性は増していると考えます。神経化学のように後者に注力している運営（宿での教育セッションなど）も興味深い。すべてポスターまたは英語での口頭発表のみとすると、後者の面がカバーしきれないように思う。外国人（学生）の参加を促す意味では、英語のセッションが皆無の時間帯はないようにも、要旨は英語にすべきとも思うが、とはいえ日本語の口頭セッションが皆無ではよい内容がある日本人学生さんがしり込みしてしまう。口頭セッションの出口などに感想（ポジティブに）や疑問を寄せたりよいものに投票するポストがあってもいい。（座長をやったとき英語だったためか質問がすくなかった。発表者も悲しいのでは？）質を担保する抑止力にもなると思う。</p>
<p>フォーラムの時間帯がポスター発表とかなさっており、ポスター発表をみる時間があまり取れなかった。ポスターのみの時間を作ってほしい。□</p>
<p>今年に限りませんが、ランチョンセミナーのお弁当数が少ない。参加人数に応じて、数を増やしてほしい。</p>
<p>生化学はすでに研究手法の1つで、各分野の分科会の方がレベルが高く、分科会の方が参加しても面白いです。英語での発表は、他分野の研究をよりわかりやすくするため、辞めて欲しい。全学問のお祭りの学会（例えば内科学会）にすべきと思う。</p>
<p>多くの会員は複数の学会に所属しており、会期が長くなると、期間の一部のみ参加する会員が増えると思う。特別講演を行うにしても、その時間帯に並行して別のプログラムを進行させることで会期を短縮しても問題ないと思う。□</p> <p>論文は研究の成果を正確に、かつ、全世界に向けて公表するものであるのに対し、学会大会は会員間での情報交換や議論の場であると思う。会員がほぼ全て日本人なのに、大会で日ごろ使っていない英語を使用しても、情報交換や議論の妨げになるだけであると感じる。</p>
<p>支部を活性化するため、支部会単独あるいは合同大会を勧める。場合によっては、ネット大会を開催する。発表はできるだけ口頭発表しポスターでの同時発表を推奨する。言語は日本人の場合は日本語と英語併記とし、他は自由とする。世界に日本語を広める取組を行う。懇親会は若手を中心で実施し、交流を深めると共に切磋琢磨する環境を整える。大会のあり方として、複数の学会で共通テーマを設定するセッションを設け、幅広い研究相の交流を深める。新しい研究分野の創出を図る。</p>
<p>発表形式は、ポスターのみ、口頭のみ、両方を自由に選択できれば良いと思います。□</p> <p>発表言語は英語が理想だとは思いますが、現実問題として、英語に限定すると学部学生にはハードルが高すぎます。（地方の6年制薬学部）□</p>
<p>本学会のような大規模な学会は、異なる分野の発表を聞いたり、小規模の学会では会う機会のない方々と交流できるのが魅力です。特に地方にいと多くの学会に参加する余裕はありませんので、（分子生物学会との）合同開催が望ましいです。</p>
<p>生化学会と分子生物学会そのものを統合する方向が妥当と思われる。少なくとも年会は合同でやるべきと考えます。似たような学会を2回もやるとなると、どちらかにしか参加しない人が多くなります。また、発表などを英語化にすると、発表しない人も増えるといった弊害も十分に考えられるので、基本的に要旨や発表スライド、ポスターを英語化する、という程度留めるのが妥当であると思います。</p>
<p>暫く年會に出席していないのですが、分野に限定しない大会で各分野の現状の問題点やトピックがわかるのはありがたかった印象があります。それから言語は基本日本語で考えていただけませんか？要旨やポスターをざっと見るには他国語よりも日本語の方が容易ですし、日本語で論理的に説明ができないようでは他国語でもできないと考えます。というのも以前ポスターで質問しても要領を得ない説明をする日本人のドクターコースの学生さんが多かった経験がありますので。私には形式よりも著名な先生方がポスターやシンポジウムなど議論の場にいらっしやらないことが問題のように思いますが、いかがでしょうか？</p>
<p>生化学も分子生物学も手法の一つで、生命現象の解明のためには、いずれかあるいは両方の手法を使います。学会員の多くは、両方あるいは、昔は生化学的手法を用いていた人で、合同開催がなされるようになって特に生化学に残る人が減ってきたと思います。ここで、生化学的手法しか使わない会員を集める意味は無いし、ほぼ分子生物学的手法に頼っているが、ごくたまに生化学的手法しか使わない人の参加を集めるのが難しい現状があります。ライフサイエンス全般を扱う研究者を集めることが意味があり、生化学・分子生物学にこだわる意味合いが無いと思います。私のように生化学的しか用いないものでも、分生の発表に大変興味がある。今後も合同開催を企画していただきたいし、その先に学会の統合を考えていただきたい。</p>
<p>生化学の研究分野が広範囲にわたるため研究者自身の関与する領域の発表が割合少なく、出席する意義をあまり感じなくなっている。全体の集会は分子生物学会と合同で開催し、最少日程にして特別講演やシンポジウムのみとし、分野を限定した一般演題のみの集会を開催したほうが参加する意義を見出しやすい。この場合、価値の高い演題には十分な口演発表時間を与える必要がある。Plenary sessionを設定する等の演題の差別化も必要である。こうすることにより、演題出題者および発表者の意識が高まる。一般演題のみの学会に関しては分子生物学会以外の学会との合同開催も考慮する。□</p>
<p>□</p>
<p>国際学会・シンポジウムという位置づけで英語での発表にすることにより、外国からの参加者を増やすほうがよい。日本語でも英語でも良いとするなら、日本語を解さない外国人の参加は望めなく、長期的に見て学会の活性化は望みがたい。</p>
<p>合同学会は開催月が一定であれば賛成。困るのは、合同開催のために生化学会開催日が9-12月間でぶれることである。12月開催の翌年が9月開催とすると要旨締切りまで半年程度しかないことになる。</p>
<p>1. 生化学会の単独開催について：毎年同じようなテーマでシンポジウム、一般講演、ポスター発表を見直す時期ではないか。年度ごとにテーマをいくつか絞り、開催してはどうか。テーマによって、関連学会との合同・提携も可能である。2. 開催期間：1と関連して、期間も短縮、経費も節約できる。3. 懇親会：長老と役員が中心の懇親会は別途開催し、一般会員が自由に参加・討論できる機会を設ける。参加者が少ないようなら中止も可。4. マスコミに公表された話題性のある成果について、学会指定講演を依頼し、客観的・科学的な情報の共有を図る。</p>
<p>素晴らしいことではあるがとにかく多彩で演題数が多過ぎる。新視点の、論文同等のしっかりした内容を持つもののみとするために査定をしっかりとするのはどうだろうか。若いヒトにとっては、お祭り？気分ではなく、また学会デビューが目的でもなく、生化学でモノを言うという事がどういうことなのか、また未来について思いをはせる一瞬が持てる知の場であってほしい。</p>
<p>また分子生物学会との差別化として分野毎に行って参加人数を減らし、全員が口頭発表できる学会にするのも良いと思います。</p>
<p>学生に発表の機会を与えて頂いて感謝している。</p>
<p>[1] シンポジウムの意味がない。一部の人が友人を誘って、何か「選ばれたグループ」になって自己満足しているだけ。シンポジウムのレベルが高いとも言えない。□</p>
<p>[2] 同じ人達が生化学会と分子生物学会の役員になっているのはどうしてか？名誉職と考えているのか。その人達同士が相談すればいつでも分子生物学会との合同開催は可能である。その人達の合同開催についての意見を署名入りで公開して欲しい。</p>

時代に応じて柔軟に運営されることを希望します。いろいろ試しながら良いと思います。他の学会との区別（アイデンティティー）は明確にした方が良いと思います。生化学会で学会発表することの価値を高めて欲しいです。要旨を少し厳しく査読して、既に発表済み（論文になっている）、過去の発表の焼き直しとか他学会での発表と重複する内容はリジェクトするとか。（現状でもリジェクトはありでしょうか？）プレリミデータをもち寄って議論できるような学会が良いと思います。（守秘義務・他グループのアイデアを盗まないということを理解させるためにも）

生化学会のビジョンとミッションを明確にすべきと思います

大会では生化学という学問分野が薄れているように思います。もう一度分野の再興を願います。

かつて行われていた教育講演や一般市民に対する公開講座等の企画を希望します。現役を離れてもなお勉強のために出席したいと思うのですが、あまりに重箱の隅のような発表が多く、ついて行けず、昨今は参加しておりません。行くたびに勉強になる他学会へは参加しております。

ポスター発表に教員がもっと積極的に参加して質疑応答しないとレベル向上は叶わない。

講義や実習をやりくりして参加しています。分子生物学会や他の学会との合同開催は賛成です。ただし、毎年開催月が変わるのは問題です。年会の開催月は単独開催なら10月、分子生物学会との合同なら12月というように、だいたいの開催時期を決めておいてもらいたいと思います。

大会の運営は試行錯誤を踏んまえて、現状となっていると思います。□

過去の歴史的経緯はさて置いて、分子生物学会との、大会ではなく学会組織の合併を議論してはどうでしょうか。一部の方は別として、おそらく一般会員の殆どは、両学会の合併を望んでいるのではないのでしょうか。

口頭発表の場を支部会に委ねる

年会という形ではなく、テーマごとの会を開催する場合は、他学会との合同はむしろかしいと思います。今の年会のような大きなお祭りのような会は10年に一度ぐらいでよいのではないかと思います。

数の論理でいくと分子生物学会に吸収されてしまうので□

独自性を維持していただきたい。□

外国人の招聘に支援していただきたい。

現状では分子生物学会との境界線を引くことが難しいが、その違い（目的等）や魅力を明確に打ち出すことが必要である（生化学で勝ち得た成果から生化学の魅力を探るなど）。またシンポジウム等を見ていると、毎回同様なテーマや顔ぶれで開催されている傾向が見られる（視点が異なると言われればそうであるが、一工夫を）。

最終日の学会終了時刻はお昼頃にするべき。遠方から来る人は、夕方の終了時刻までいられないので、終了時刻間際の発表には人が集まりにくくなっている。

また、懇親会の料理の質を少し下げてもいいから、参加費を下げるべき。もしくは、若手と中堅以上とで参加費に差をつけるべき。学生やポスドクと、PIとが交流を深める意義は理解できるが、もう少し、若手同士の交流が深まりやすい、敷居の低い懇親会にしてもいいのではないか。

要旨を英語で書くのは、海外の研究者が閲覧できるようにするという点で理解できるが、発表において、討論を日本人同士が英語でやっているのはやめた方がいい。討論の時間が限られている以上、効率よく質のいい討論ができるように、日本人同士なら日本語で討論すべき。